

蓬萊山輝夜に成りました。

由峰

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

蓬莱山輝夜に成りまして。

男は死んで輝夜に成って、でも記憶のない輝夜は……。

己の中にある男としての感性に苦勞する輝夜の物語。

それはそれとして、強く賢く美しい輝夜を見てね。

Pixivの『二次元美少女に成りまして。』からの転載品です。

# 目次

34	蓬萊山輝夜に成りまして。	3 / 1
27	蓬萊山輝夜に成りまして。	2 / 2
17	蓬萊山輝夜に成りまして。	2 / 1
10	蓬萊山輝夜に成りまして。	1 / 3
7	蓬萊山輝夜に成りまして。	1 / 2
1	蓬萊山輝夜に成りまして。	1 / 1
43	蓬萊山輝夜に成りまして。	3 / 2
59	蓬萊山輝夜に成りまして。	4 / 1
68	蓬萊山輝夜に成りまして。	4 / 2
79	蓬萊山輝夜に成りまして。	5 / 1
89	蓬萊山輝夜に成りまして。	5 / 2
97	蓬萊山輝夜に成りまして。	5 / 3



## 蓬萊山輝夜に成りました。 1 / 1

重篤患者用の病室で、男はひとり震えていた。

見舞いの品や花すららない、殺風景な白塗りの部屋はひどく冷たい。

時刻は直に深夜を回り、早朝となる時間帯だ。

閉ざされたカーテンの向こう側。窓の外からは新聞配達員の吹かしたであろう、50ccバイクの排気音が幽かに聞こえていた。

「いやだ……死にたく、ない」

涙混じりの男声が、薄闇へ溶けて消えてゆく。

彼は理解していた。

命の灯が消える瞬間を、

己の心臓の止まる瞬間を、

目前に迫った死の瞬間を、

数分もすれば死ぬであろう現実を理解していた。

身体が未だ嘗てない不調を伝えてくるのだ。

異様に早鐘を打つ心臓が、車の様なノッキング現象を引き起こす。

「どうして、こんな、おれ、なんのために生まれてきたんだよ」

男に家族はいない。

学生時代の友人も社会人となってからは疎遠だ。

恋人は大学生時代にひとり。彼自身は結婚を前提に考えてこそいたものの、結局は独り善がりですべて終わってしまったのが十年前の話であった。

天涯孤独。

身内はなく、友もなく、頼るアテすらありはしなかった。

誰に最期を看取られることもなく、三十半ばで震えながらに孤独死する現実を男は受け入れられない。否、受け入れたくなかった。

「いやだ……ふざけんな、くそ」

徐に、男はベッドから這い出す。

震える身体は汗に濡れて、肌へ張り付く薄手の病衣が着崩れる。

何か目的のある行動ではない。

ただ、ジツとしているのが堪えられなかったのだ。

「あーくそ、くそが、くそつたれ！　なんだよ！」

立ち上がった男の後頭部からドツと吹き出す汗。凍えるほどに冷えていて気持ちの悪い冷水を、男は洗髪感覚で力任せに振り払う。

直後。

「うあつ、ぐつ痛ええ……」

転倒。

彼の身体はすでに歩くことすら困難であった。

ベッド脇の床頭台を巻き込みながら派手に転がって、薄明かりで照らされた床に引き出しの中身を撒き散らす。中には入院手続きなどの重要書類、印鑑や筆記用具。財布に携帯端末。コミックスとライトノベルが数冊。お気に入りのファイギュアが一体入っていた。

「……はは」

乾いた笑いは男のモノで、しかし彼は涙していた。

表情は死んでいる。

目に光はなく、ただ瞳に映る物を反射するだけであった。

「ああ、」

不意に、男の視線が定まりある物を捉えた。

「「こんな、二次元の美少女みたいに産まれてたら」

先までの取り乱し様は鳴りを潜めた。

虚ろな男はヘラヘラ笑ってファイギュアを眺めて言う。

到底、正気の顔ではない。

死を前に情緒不安定となり狂ってしまったと、そう断じる他ない状態であった。

「人生楽勝で、楽しくってしようがねんだろーなあ……」

有り得ない妄言。妄想の産物だ。

現実を直視出来ない人間の発想そのものである。

現実逃避だ。

「美少女に生まれ変わって……」なあに？ 私に見惚れちゃった？」とか言つてよ！ ハハハツ最高じゃん！ 童貞共おもしろおかしく転がしてな！ 中身男だから、野郎にクる女とか楽勝にいけんべ！ 現実のカワイコぶりっ子とは格が違うね！」

ケタケタと、愉快に笑う男は涙を零す。

「でも、やっぱ女の子だな！ 可愛い子、全力で落としにいつて……二次元美少女クラスなら同性も惚れ込むだろ！ 男の振る舞いでイケるかな？ ツカ？ ツカっちゃう？」

ハツハツハツ！」

瞳孔の開ききつた男は垂れ流す。

逃げるようにして、現実乖離した妄想の世界を夢想してゆく。

止まらない妄言。止められない空想。止まったら泣き叫んで、どうにか成ってしまいたいそうだから、どうにかなってしまう彼は続けた。声を大にして、死の気配を恫喝する



ようにして、頭の中の趣向を垂れ流す。

「行くならどんな世界がいいかな……異世界もイイケド、現代生活に慣れてるとキツそーだよなあ。現代が舞台作品で」

崩れ落ちる身体は限界の証であった。

倒れた拍子に顔を強打して、前歯と鼻が潰れても男は笑う。

笑ってだくだくと言葉を紡いだ。

いつそうと早口で、駆り立てられたように早く。早く、零す。

急がないと、もう時間がないと分かっているのだ。

「すごい音がしましたけど大丈夫で、キヤー!?!」

彼の意識の外では大騒ぎとなっていた。

早朝間際、寝静まった院内で派手に騒げばさもありなんだ。

「先生、早く! 急いで! 二二一号室の患者さんが!」

それでも男は止めなかった。

倒れ伏した身体を看護師に抱き起こされて、止めどなく零れ出す体液を止血されながらも絶対止めることはしない。

「なんですか? はい? なんて言ってるんですか!?!」

そうして男は視界に大好きな『』のファイギュアを映しながら、暗転する意

識の中で最期に目に入った作品タイトル

』を読み上げて死んだ。

## 蓬萊山輝夜に成りました。 1 / 2

蓬萊山輝夜は美の化身として産まれ落ちた。

赤子はおおよそが「猿のようだ」なんだと例えられるなかでいて、彼女は生まれ出でた瞬間に名前を美姫と名高い『輝夜』と定められた特別な存在だ。

輝夜の両親は当初こそ様々な名前を考慮していたという。

女の子なら、男の子なら、名前の一部には両親の一字を。どこにでもある名付けの選定は結局、産まれてからゆっくり決めようと話はまとまった。しかして両親は輝夜が産まれた瞬間に、おとぎ話のかぐや姫から名前を決めたと後に語っている。

「あなたの顔を見たらね、『輝夜しかない』って思ったのよ」

「おまえの顔を見て『輝夜』以外にありえないと確信したんだ」

竹取物語のかぐや姫。

輝かしい美貌を持った月の姫君。

それこそが彼女、蓬萊山輝夜の名の由来であった。

「まあ実際、今の私のかぐや姫なのよねえ……二次元産ダケド」

彼女は転生者であり、元は三十中半の男だ。

前世に存在した東方Projectの登場人物。永遠と須臾の罪人。地上に隠れ住む月の姫。『蓬萊山輝夜』その人と成った、つまりは成り代わり転生者である。

もつとも、『東方Project』や『蓬萊山輝夜』を輝夜自身はほぼ知らない。

輝夜には産声を上げた瞬間から自意識が在った。

自我の元は男であり、歳は三十代の前半。みつともなくも無様に孤独にむせび泣き、大好きな二次元美少女キャラクター『蓬萊山輝夜』に成りたいという空想に狂った。

『東方Project』の蓬萊山輝夜』は竹取物語のかぐや姫当人であり、そうして最期は何かを願って死んだ先が今へ繋がる。

「こんな情報だけ識っているも……どうすればいいのよ」

前世の有無を識っているも、輝夜に前世の記憶自体はない。

在るのは大人として生きた自覚と自意識に頭脳。死の直前に抱いた強烈な想いと妄執の産物たるキャラクター情報。後は男としての心だけだ。

「永遠と須臾を操る程度の能力って……いや能力って」

これは一種の呪いだと彼女は考えている。

使えもしない空想上の登場人物『蓬萊山輝夜』の情報。あべこべな精神性。他を惹く異常な美貌。そして何よりも、今現在最も頭の痛い問題はただ一つ。

「かぐやちゃんによんでるの?」

「竹取物語」

「たけとりく？ とりさんのごほんく？」

「かぐや姫の物語よ」

「あ。それしつてる！ おかあさんによんでももらつた！」

「そう。良かったわね、向こうでお友達と遊んできなさい」

「かぐやちゃんはいかないの？」

「私はこれを読んでいるから。終わつたらね？」

「うん！」

幼稚園児にして古文を読み解く美少女。蓬萊山輝夜の中身は精神年齢四十に迫る大人であつて、幼児と戯れて喜樂を抱く心は持ち合わせていないのだ。

大人が幼児に交じつて、幼児扱いを受けて過ぐす。

輝夜の現状は罰ゲームと大差なかつた。

「輝夜ちゃん？ こつちでお友達と遊びましょう？ ね？」

「……先生。私は本が読みたいです」

「んく、でも今はお外で遊ぶ時間だから。ね？」

「……………わかりました」

先生の目は笑つていなかった。

## 蓬萊山輝夜に成りまして。 1 / 3

輝夜の美貌は成長するにつれて増してゆく。

最盛期は十代中半から後半だと、彼女自身は確信していた。

前世の情報では『蓬萊山輝夜』の肉体年齢がその辺りであり、歳を経る毎に生まれながらに脳内へと刻み込まれていた容姿に酷似してゆくのだ。

「輝夜、なに読んでんの?」

現在、小学五年生。

輝夜は十一歳になった。

あと五、六年も経てば絶世の美少女が世に誕生するであろう。

彼女の憂いは増すばかりであった。

「それ面白い? 輝夜」

口り真盛りの今でさえ、輝夜は年齢に関係なく人を寄せた。

性犯罪の被害者になりかけたのも十や二十では利かない。

もしも中身が歳相応であったのなら、とうの昔に喰いモノと成っていた筈だ。

「今日シンイチローがタイヤキ買って帰るから輝夜もうち来いよ」

今を平穩に生きているのは、偏に輝夜の努力の賜物であろう。

そうであつて欲しいと、彼女は帰路に隣で騒ぐ小型の猛獸を見つめる。

「ん……？　どーした輝夜？　あ、つぶあんだよ」

「別に中身を訊きたい訳じゃないのよ」

小学生ながらも金に染めた髪と深淵を覗く黒い瞳。華奢な体軀と愛らしい小顔。女顔負けの白い肌はきめ細かくて美しく、美少年と呼ぶに相応しい彼の名を佐野万次郎。輝夜が絶世の美少女であつた小学校一年生の時分から、今日日今まで常に彼女の隣の席を陣取る幼馴染であつた。

輝夜からすると万次郎の存在は有り体に言えば迷惑で、しかし同時に彼が傍にいる限りは誰も近寄らないので有り難くも在る存在。つまりは複雑な心境の相手、それが彼女にとつての万次郎であつた。

無論、彼がごく普通の少年であれば輝夜も迷惑だとは思わない。

むしろ超絶美少女であつた彼女に一切媚を売らず、下卑た視線を向けぬ数少ない存在として、あるいは純真無垢な美少仲間として大いに歓迎していたであろう。

だが、しかし。

佐野万次郎は残念ながら輝夜の為の人除け機能だけではなく、それ以上に面倒な人寄せ機能を搭載する謂わば歩くトラブルメーカーであつた。

その機能が加速度的に効果を發揮し始めたのは、小学生ながらに暴走族の『罰漢』なる高校生チームを潰して以降。より正確にはチームの総長を叩き潰した頃からである。

切掛けは幼くも美しい輝夜の美貌で、喧嘩の端となったのは輝夜の毒々しい口撃。物理的攻撃を最初に仕掛けたのも輝夜ではあるが、罰漢総長の薄れゆく意識を追い打ちで奪ったのは万次郎であるからして、輝夜の中では全て万次郎が悪いことと成った喧嘩が万事の原因と確信していた。

「えーじゃあなんだよ」

「あなたと外を歩くと必ず……」

「あ、マイキーくん！ と、か、かか、ぐ……やちゃん」

今日も今日とて万次郎の万人引力は仕事を果たした。

輝夜と万次郎の帰宅路とは逆方向から掛かる呼び声。やけにどもる少年の隣に立つ、蟀谷に龍のタトウを刻む少年。見覚えのない特徴的で典型的な長身の不良の姿に、輝夜は深い息とともに続く言葉を吐き出した。

「不良が絡んでくるじゃない。それが面倒くさいのよ」

「オレがいなくても輝夜は絡まれんだろー」

口には啞えた棒付きキャンディをカラコロ転がす万次郎は、至極当然のように告げれば自然と輝夜の手を引いて歩き出した。



「ちよつと。いつも言つてるけど手を取らないでちようだい」

不服顔の輝夜を何のそのと万次郎は歩く。

鼻歌交じりに気持ち足取りも軽い姿は機嫌の良い証拠であろう。

反して輝夜の顔は不機嫌をありありと表していた。

彼女はなまじ整い過ぎた美貌のせいで喜怒哀樂が明白なのだ。

「あの……マイキー……くん、だよね」

「うん、そうだよ。なに」

長身の不良少年は真赤な顔で歩み寄つた万次郎へ訪ねた。

彼の顔はマイキーこと万次郎に向いてはいるものの、視線はいつさいが一步後ろに控える輝夜へと注がれている。

輝夜はそんな見飽きた反応に鼻を鳴らして万次郎の手を振り解くと、脇に抱えていた

本の世界へ意識を落としていった。

「中学の先輩が君と、あと輝夜つて子呼んでこいつて……」

「……あ？」

刹那、空気が変わった。

万次郎の眦は下がり、飴の碎け散る音が響く。

其処にきて少年の目はようやく万次郎を捉えた。

周囲の温度が急速に下がっていく様な錯覚。其れを殺氣と知るの、本の世界へ旅立ちながらも状況を把握し続けている輝夜だけだ。

「あ、いや。無理には……」

「うふ」

「へ？」

「お前の頼みだから聞いてやる」

それはひどく打って変わった対応であろう。

明らかに断る風の反応で賛成した万次郎の返答に、意表を突かれたらしい少年は次いで輝夜へ向く。呼ばれているのは彼女も同様なのだからさもありなん。

ましてや輝夜は万次郎以上に華奢だ。

荒事の場合へと連れて行くのに抵抗を覚えるのは普通であった。

「なにしてんの」

もつとも万次郎は気にしない。

読書へ勤しむ輝夜の背後に周り込むと、彼女のランドセルを両手で押して少年へ促した。

「早く案内してよ。たい焼きがうちで待ってるんだ」

そうして迎えに来たにもかかわらず、なぜだか不承不承の顔をして二人を案内する少

年。彼は自身が「マイキー」と呼んだ存在を知らなかった。

彼は自身が心配した輝夜という少女を知らなすぎ過ぎた。

「チーッス呼んできましたよ〜」

輝夜と万次郎の案内された場所は、通学路からさほど距離のない駐車所。屯していたのは七人の中学生。全員が不良を服装で主張する典型で、わかり易く中央に踏ん返り返る集団の頭が見えた。

だから。

駆け出したのは同時で、跳躍したのも同時であった。

ならば当然の様に着地も同時で然るべきだ。

肉を踏み潰して、骨を砕く音がした。

重く水々しい音が其れに連なり、次いで軽快な着地音が二つ鳴る。

「群れてしか行動できない奴らが……オレたちになんの用？」

「……たち？　ねえ、私を数に含むの止めてもらえない？」

呆然となる場に堂々君臨した二人の小柄な小学生。ひとりには桜色のシャツに合わせた同色のカーディガンをまとい、ロング丈のスカートを着こなす絶世の美少女。ひとりは黒のジャージで少女と同程度の体軀を誇る美少年。とても体格の優れた中学生を相手に出来ないであろう二人はしかし、この場の誰よりも強者の風格をまとう。

「オレが七小のマイキー様で」

威風堂々と振り向き様に名乗りを上げる万次郎。輝夜は皆が聞き入るその隙に、これ幸いと手近の一人の腕を優しく取った。

「へ？」

瞬間。

躊躇なくコンクリートの地面を目掛けて頭から投げ落とす。

相手の体重と身長差を利用した投げ技。近年しばらく輝夜の十八番となっているその合気の技は、殺意の高さを窺わせるには十分であった。

実際に病院送りとなった性犯罪者の数は十を超す。

「ソイツが七小の戦姫、輝夜姫だ」

「それやめて」

残りの面々はさながら蜘蛛の子を散らす様に逃げ去った。

「おまえ四小のドラケンだろ？ おまえみたいにカツケー奴がさ、なんであんなカス共とつるんでんだ？ オレたちの友達になれ！ ケンチン！」

「また私を数に入れたわね？ ほんといい加減にしなさい」

「これが後の東京出會三トップの出会いである。」

## 蓬萊山輝夜に成りました。 2 / 1

西暦2005年。

中学三年生となった輝夜は前世の情報通りに成長してゆく。

煌めく濡れ羽色の黒髪。肌は穢れ知らずの処女雪色。女性らしく華奢な体軀は黄金比率の体現を始め、静謐と神秘の掛け合わさった、闇夜へ輝く月を想わす幽玄の美貌は限界知らずに増すばかりであった。

其処へ幽かと残る幼さが未だ青い少女性に拍車を掛けていて、産まれながらに同性愛の性癖を植え付けられてしまった彼女は常日頃から忌々しく思い零す。

「どうして私の理想の相手がココにいるのよ……!」

輝夜は記憶がなくとも前世の想いを継ぐ存在だ。

否、継いでしまった存在である。

魂へ刻み込まれた性癖は前世の影響を直に受けていた。

必然。

男が嫁とした『蓬萊山輝夜』は彼女にとっても嫁であった。

オタク用語の『嫁』を定義するならばだ。

謂わば己の理想を詰め込んだ究極的な恋愛対象。次元すら飛び越えて、触れることは疎か言葉を交わすことさえ出来ず、ただ一方的に想い焦がれ情念を向けるしかない存在を指し示す。

輝夜にとって恋愛兼性的対象とは、趣味趣向を抱き合わせた理想像とは、二次元存在たる『東方Projectの蓬萊山輝夜』其の人であった。鏡を見れば何時も其処にはその理想に近い相手があり、年々己が求めた究極的美少女が完成されてゆく様子は、同時に彼女へ途方もないもどかしさを抱かせ続けていた。

何せ其処にいるのだ。

絶対に叶わぬ恋した相手。

二次元の嫁が目の前にいるのだ。

初めから触れられない相手であれば。

画面の向こうの二次元でしか在り得ない存在であれば。

輝夜は前世にいたオタク同様に、三次元には興味の欠片すら抱かず、二次元に恋するユリ女子として人生を謳歌できていたかも知れない。

「其処にいるのに……、運命の相手が其処にいるのに……」

輝夜にとって憧れの女性像が『蓬萊山輝夜』であったならば無問題。成りたかつた自分になれ、第二の人生を華々しく生きていたであろう。

だが、しかし。

輝夜にとつて『蓬莱山輝夜』は憧れの対象ではない。

成りたい存在ではなかった。

抱きしめたい対象なのだ。

にやんにやんしたい相手なのだ。

手を繋いで買い物へ、海へ、山へ、そしてホテルへ。

自身の想いの全てをぶつきたい相手であった。

「理想の恋愛対象に自分自身が成つてどうするのよ！」

『俺の嫁』が実在してしまったにもかかわらず。

現状、当人たる輝夜だけは絶対に結ばれない形と成つた。

「やっぱりこれは呪いよ！ ああ、まったくもつて苛立たしいつたらないわね！ ほん  
と理想通りよ私！」

輝夜は『蓬莱山輝夜』と成つて今日も脱衣場の鏡を眺めた。

無論、いろいろな意味でだ。

「姫、ひとりで何を騒いでいるの？ そろそろ学校へ行く時間よ。……姫？ 姫っ！

はあ……もう、ちよつと輝夜！ いい加減にしなさい！ 学校、遅刻するわよ！」

15歳の中学三年生。

実家は富豪のお金持ちで。

誰もが惚れ込む容姿はまさしく至宝とされていて。

学校では小学時代から成績優秀文武両道にもかかわらず。

素行は極めて不良を貫くクイーン・オブ・アウトロー。

「……………はあい。いま出るわよ、えーりん」

鏡に恋する元男乙女。

それこそが教育係に頭の上がらない蓬萊山輝夜である。

「人生ままならないものね」

／

淡い桃のシャツに羽織った上着は有名ブランドの特注品だ。

洋物のジャケットトヘ和風の袖を付け足して、大きなリボンとうつつすら描かれた朧月の

雲紋様。シャツの色と合うように、わざわざ同じ染料を用いて眺えさせた其れは輝夜一

番のお気に入りだ。

そして上着が和装を意識したものであるならば、当然の如く下も和風に揃えて然るべ

きであろう。

意識したのは十二単。淡い桃の上に対して下は鮮烈な朱だ。

上着同様に薄く描かれた紋様は、金糸で編まれた竹に竹の葉。桜と梅の花に紅葉。裾



にはフリルを拵えてもらつていた。

靴はロングのブーツ。

靴底に鉄板入りの機能重視だ。

鞆は持たない。

輝夜は女の子ゆえにP○Pより重い物は持たない主義だ。

「良し、今日も完璧な『蓬萊山輝夜』(私の理想の私)ね！」

時刻は通学前の朝早く。

輝夜は玄関横の姿見を前に、軽やかに回つて口零す。

遠心力で花開く様に広がり踊つた超ロング丈のスカート。十二単を意識した割には

薄手の布地が、ブーツを覆い隠せば準備は万端となつた。

爪先で二度三度、床を蹴つて彼女は笑う。

呪いだ何だと言いながらも、彼女はこの瞬間を好んでいた。

この『蓬萊山輝夜』理想の恋愛対象へ限りなく近づく瞬間をだ。

絶対に結ばれなくても、鏡の中へ完成された嫁が映り込む。

「我ながら矛盾するけど……どうしようもなく好きなのよね」

それが嫌で厭で堪らないと、輝夜の笑顔が崩れて消えた。

いつも通りだ。

あの『蓬萊山輝夜』を直接見られて歓喜する魂。自分の意志とは無関係に、『蓬萊山輝夜』を無条件で愛する自分の中の何某。否、前世の自分という名の魂がもたらした感情に嫌気が差す。

苛立ち、忌々しく思う。

腹立たしくて、己の奥底を力の限りに掻き糞りたくなるのだ。

そうして彼女は、蓬萊山輝夜はいつも外へ出て行く。

だから彼女はいつも不機嫌そうに顔を顰めて門を潜るのだ。

「あ、姫！ おはよー！」

「ハヨ、輝夜」

「おー輝夜、おはよ」

都内の一角へ堂々と居を置く、武家屋敷染みた蓬萊山宅を出て十数分。中学へ入って毎朝々々同じ場所で屯して、輝夜を出迎える三人組みの顔を見れば彼女は楚々と口開く。

「三人ともおはよう。エマは今日も元気ね、素敵よ」

不機嫌であった輝夜が神々しくも穏やかな笑顔を向けた先。其処に立つのはガラの悪い二人組で左右を挟まれた、金のセミロングを左肩へ流し落とす美少女であった。

名を佐野エマ。

彼女は輝夜の小学時代に出来た妹分にして大親友であり、エマの横で呆と棒立つ腐れ縁の幼馴染、佐野万次郎の義妹でもあって、万次郎とは逆位置で棒立つ金の辮髪に蟀谷へ龍のタトウーを刻んだ男、龍宮寺堅の彼女といつてもない肩書を併せ持った存在である。

「えへへ、ほんと？　ありがと姫！」

「おい輝夜。オマエいつも逢う度にエマ口説くなよ」

「輝夜つてばエマ好きすぎっしょ」

ケタケタ愉快そうに笑う万次郎に反して、疲れ切った顔でボヤクのは龍宮寺堅ことドラケン。またの名をケンチンである。

彼は小学五年生の時分。

鮫島一派を切掛けとして出会った万次郎と輝夜に惚れた。

以降は今日日今ままでほぼ毎日ふたりにくっついて回っていたはいいものの、結ばれた恋人から毎回のようになつて自慢されている、姉貴分の輝夜との惚気話へ付き合わされて辟易していた。

無論、嫌いという訳ではない。

ただ、余りにも幸せそうに語る恋人に疲れたのだ。

そして、少しばかりの嫉妬もあった。

「なら別れたら？ エマは私が責任を持って幸せにするから」

「やだ！ 姫ってば大胆！ でもそこが素敵！」

「ウケる、てか俺はー？ 輝夜、俺も幸せにして」

「黙ってなさいマルチーズ小型猛獣」

堅の嫉妬を煽る様に、さり気なく、それでいて力強く。

エマに寄った輝夜は彼女の腰を抱いて言った。

につこり笑顔の万次郎に関しては、輝夜は視線すら向けていない。

彼女にとって万次郎は、足元へじやれつく犬程度の認識であった。

落ち込む万次郎。笑顔で堅に敵意を向く輝夜。彼女の胸に顔を埋めて、頬ずりを行う

エマは存外に顔がガチである。

その恋人の桃色状態に堅は頭を抱えて項垂れてしまう。

「あー……別れねえから。おら行くぞー」

「あら、残念ね。あなたの旦那はあなたを手放さないそうよ」

「知ってる！ ウチら相思相愛だもん！ 当然、姫もだよ！」

「無視？ ウケンだけど」

ここまですりも通りの挨拶であった。

エマが入学して以来、四人は何時もこうして学校へ向かう。

万次郎の自転車の荷台へ輝夜が横乗り。

堅の自転車の荷台はもちろんエマだ。

道中エマは堅に万次郎にと、次々に話題を振ってはおちよくつてゆく。そうして若い少年少女の談笑を耳に、精神年齢五十間近の輝夜はいつも通りにひとりPS〇でゲームへ勤しむ。

「姫はまたゲーム？ 今度は何やってるの？」

「CODED ARMS……FPSよ」

「FPS……？ 輝夜はほんとゲームばっかだな」

「俺さ、輝夜にゲームで勝ったことねーわ」

携帯ゲーム機が充実し始めてしばらく。

輝夜は何時でも何処でもゲーム、ゲーム、ゲームとなっていた。

そんな輝夜のゲーマーぶりを知っている面々は、基本的にゲーム中の彼女の邪魔はしないのだがしかし。今日はそうもいかない事情があった。

「悪いが輝夜、ゲームは後にしてくれ。三番隊の話だ」

堅の一言で雰囲気は一変した。

和気藹々とした空気は霞み、刺々しいモノと化す中。

しかし未だ手を止めない輝夜は抑揚のない声で報告する。

「三番隊所属、清水将貴の噂は黒よ」

淡々と、手を止めることなく。

FPSの世界で眼前の敵を殺しながら輝夜は言葉を紡いだ。

「三中近くの公園で定期的に喧嘩賭博を開催していたわ」

万次郎は、堅は、エマは、平坦な彼女の声を静かに聞いていた。そうして次々と明か

されてゆく事実には、万次郎と堅の眉間にシワが寄り、輝夜の締め括った言葉に殺気立つ。

「私たち『東卍』の名を使つてね……？」

## 蓬萊山輝夜に成りました。 2 / 2

西暦2005年7月7日。

時刻は学徒の解き放たれた放課後。

渋谷三中の近隣に位置する公園で鬪いの幕は上がった。

数十人から成る人集りの中心。半円状の石階段を客席とした舞台上で、金髪をリーゼントにした少年は血塗れとなつてなお、鬪志を燃やして拳を構え続けていた。

顔は腫れ上がり原型を留めず。

制服は血と汗に汚れ、泥で染まってボロボロだ。

すでに勝者と敗者は決していた。

誰が見ても明らかで、往生際が悪いと野次も飛ぶ。

野次は広がり続けて、気づけば処刑コールになつていた。

「もういい！ やめろタケミチ！」

「十分気合見せたよ！ もう引けよ！」

「死んじまうぞー！」

怒号怒声に交じつた制止の言葉は少年の友人であろう。

周囲の音で掻き消されない様に必死な声は遠く響いていた。  
ここが限界だ。

倒れて震える少年を見て、誰もがそう思った筈だ。

ようやく起き上がっても足元は覚束ず。

すぐに倒れてしまう。

場に嘲笑と嘲りの言葉が飛び交った。

それでも、

「引けねえんだよ！ 引けねえ理由があるんだよ！」

少年は立った。

立ち上がったって、涙を零して。

力強く、言って魅せた。

「東京社会……キヨマサ、勝つにはオレを殺すしかねーぞ」

絶対に負けないと、少年は笑って嘯く。

敗者だ。

言ったのは、逆立ちしたって勝てやしない敗者である。

肩で息をしていて、立っていることすらままならない少年。涙と汗と血が混じって出来た雫を地面に垂らす、いつ倒れてもおかしくない敗者の言葉であった。



筈だ。

吞まれていた。

数十人の喧嘩馴れた不良たちが、喧嘩の素人も甚だしい少年の放つ覚悟に呑み込まれて、騒然としていた場合は、何時しか沈黙によって押し包まれていた。

「執念……あれは、だれ……？」

三人は遠目に喧嘩賭博の推移を見守っていた。

始まった時点で、少年が乱入したのを眺めていた。

蓬萊山輝夜。

佐野万次郎。

龍宮寺堅。

輝夜はゲームの片手間に耳を立てていた。

万次郎は退屈そうに輝夜のゲーム画面を、どら焼きを食べながら覗き込んで呆としていた。

真剣まではいかなくとも、目を離さずに見ていたのは堅だけだ。

三人が揃えば何時も通りの役割があつて、だから輝夜は誰に訊くでもない問を投げた。

考えるのは、情報収集は、頭を使うのは彼女の役なのだ。

「知らね」

無意味な問に応えたのは万次郎であつた。

素気ない返答だ。

彼と付き合いのない者が聞けば、興味すら抱いていないと思うであろう言葉はしかしまつたくの逆である。

万次郎は見つめていた。

真黒な瞳で静かに、唇を舌で舐めて、見つめていた。

「執念つてのはなんに對してだ……？ あれは普通じゃねえ」

堅もまた見つめていた。

最初と違つて真剣に、少年の覚悟に向き合つていた。

その顔は何処か熱に浮かされていて楽しげだ。

「命」

輝夜は迷うことなく堅の問に答えを出す。

識っているからだ。

生死の迫つた状態で、命の懸かつた状況で噴出するヒトの情念を、彼女は誰よりも身を以て識っているからこそ、答えられてしまうのであつた。

輝夜の両隣で、万次郎と堅の息呑む音が嫌に響く。

「自分の命か、他人の命か……いえ、きつと後者ね」

己の命に執着する者が、己の死を懸ける訳がない。

ならば、輝夜には解つた。

勝てない闘いへ挑む少年が、本気で命を懸けたのだ。

そうまでして執着する何かが少年には在ると知つてしまい、執念の行き着いた先に産まれ落ちて苦しむ輝夜は、少年の行き着く先へ非常に興味が湧きだす。

「あ？ おい輝夜！」

「おお、輝夜が珍しく自分から動いたよケンチン！」

懐に愛機のP〇Pを仕舞い込んだ輝夜は一直線に歩いた。

その合間にも喧嘩賭博の舞台は進行を続けてゆく。

「バット持つてこい！ 上等だ殺してやるよ」

「オイ、キヨマサ」

彼女の耳朵を不快極まる言葉が打てば、瞬時に後方から耳馴れた男声が制止を促していた。

低く通るドスの効いた声に、全員の視線が歩む三人へと向かう。

「客が引いてんぞー、ムキになつてんじゃねーよ主催がよー」

「嘘だろ!? あれつて」

周囲の反応は激的であった。

「東京社会副総長『無敵のマイキー』だ……」

「東京社会副総長のドラケンも……」

「おいおいありや……もしかして」

「東京社会参謀副総長……『戦姫の輝夜姫』だ」

特に目を惹くのは、否応なしに先頭の輝夜である。

先頭にいるからではない。

蓬萊山輝夜だから全てを惹いて止まないのだ。

「あ、あ、あの、輝夜さん！俺、三番隊で特攻やつ」

「気安く名前を呼ばないで。不快よ」

赤石と名乗る少年の言葉を最後まで聞かず。

少年の居る進路上に立つ、堅いわくキヨマサを前に。

「邪魔」

一瞥すらくれずに、一声で退けた輝夜はたどり着く。

酷く傷つき、痛ましい少年の前へ。

そして、

「あなた何？ 本当に中学生？ 実は死んだ転生者とか？」

少年の顔が赤から青に変わった。

## 蓬萊山輝夜に成りまして。 3／1

西暦2005年7月8日。

日差しの心地いい、穏やかな平日の教室。

教師の唱える謎の呪文を背景音楽に、花垣武道は己の行く末を考えていた。

清水将貴ことキヨマサに反逆した昨日。自身の命を賭した闘いで、一応の最低目標である奴隷解放という勝利を勝ち取れたのは良いもの。中ボスないし小ボスのキヨマサの奴隷から、ラスボスのペットに昇格したとも言えるのが彼の現状だ。

しかし、それだけであれば問題はなかった。

もとよりタケミチはマイキーこと佐野万次郎か、あるいは稀咲鉄太のどちらか一方と接触する事を目標に行動している。

それは西暦2017年の現代軸で、協力者の橘直人に「絶対に遂行してください！」と言われた事柄だ。

つまり目的は順調に果たされていた。

にもかかわらず、彼が頭を抱える要因は一つ。

『ねえ、あなた本当に中学生？ 転生してるとか、実は中身が違うとか……そういうの、

あるんじゃないかしら？」

蓬萊山輝夜の存在だ。

颯爽と賭博場に現れ、タケミチをある意味で救った張本人。しかしてその後、執拗にタケミチの中身を問いただしてきた、この世の者とは思えない絶世の美少女。

彼女の尋問は、万次郎がキヨマサを「誰だオマエ」と叩き潰し、ドラケンこと龍宮寺堅とふたりで無理やりに引きずって帰るまで執り行われていた。

その時の蓬萊山輝夜の顔を、表情を、瞳を、威圧を、タケミチは忘れられない。

（怖えよー。なんなんだよあの美少女!? 圧がキヨマサの比じゃなかったよ！ 今ならキヨマサに殺すぞ宣言されても鼻で笑えちやうよオレ!?）

美人は怒ると怖いと言うが、輝夜のそれは一種の狂気を孕む感情だ。

なればこそ、存在そのものが彼女の狂気のコア部に触れてしまったタケミチは、彼女の誰にも明かさぬ知られざる本質的部分を直に体感する羽目となっていた。

死の絡んだ感情が、生半可な訳がない。

それを、タケミチは理不尽に自覚できないままに浴びた。

（だいたいマイキー君の側にあんなヤバい美少女いるとか聞いてねえぞナオト!? 蓬萊山輝夜とか聞いたことねえよ！ ……………あれ?）

不意に、タケミチの思考は止まった。

自身の心内でまくし立てた言葉を繰り返し、そうして至極簡単な疑問に衝突する。

「……あれ？ オレ、蓬萊山輝夜なんて名前聞いたことねえぞ？」

今現在の花垣武道は、12年後の未来から来ている。

そのタケミチが、まるで存在を知らなかった。

加えて、昨日は輝夜の尋問もあり半ば放心状態で帰宅した彼はふと思いつく。

（アイツらは、アツくんたちはなんて言ってた？）

賭博場に人の気配が消えた後。穏やかな公園に戻ったその場所で、放心状態のタケミチを除く溝中五人衆は各々勝手に盛り上がりを見せ、果てにはタケミチに向かって酷く面倒な絡みをしていた。

『にしてもお前ええええ！ タケミチイイ！ なんでお前が輝夜姫とあんな近くで会話してんだあああ！ クソおとおお！ 羨ましいiiiiiiii！』

『許さねえ……おれはお前を許さねえぞ！ あの輝夜姫と吐息の掛かる距離で……なあ、どんな匂いだったんだ？ どんな匂いだったんだよおおお！』

『ははは、あーまあ、ね……助けてくれたのはすげえ嬉しいけど……それはそれとして抜け駆けはよくないよな。輝夜姫と知り合いだったとか……言わないよな？』

『タケミチ………おまえ、関東圏の輝夜姫親衛隊を敵に回したんじゃないか？』

「……ウンソウダネ」



記憶を辿ったタケミチの不確かな疑問は確信へ変わる。

(ウンソウダネとか聞き流してる場合じゃねえよオレ！ オレ以外みんな知ってんじやん！ え、なんで!?! つか関東圏の輝夜姫親衛隊ってなにアツくん!?! 関東圏!?! 範囲広くね!?)

教室の四方から百面相を披露するタケミチへ飛ぶ視線にしかし彼は気づかない。

彼はそれどころではないのだ。

ラスボス万次郎に友達と書いてペットと読む「ダチ」宣言を受け、隠しボスかはたまた裏ボスの蓬萊山輝夜になぜか異様な興味関心を持たれてしまった哀れな一般人。それが今の彼である。

(いやいや落ち着けオレ。一旦冷静に……けどまじで蓬萊山輝夜なんて知らねえぞ。あんな美人でアツくん曰く関東圏に親衛隊がいる存在……中学時代に溝中五人衆でそんな名前出たことねえ……よな?)

思考に暮れるタケミチはすでに周囲へ意識を向けていなかった。

教師の念仏すらも耳には入らず、東京中會の事すら捨て置き、ただただ蓬萊山輝夜という美少女について頭を回す。

ゆえに気づけない。

自身に向けられていた奇異なる物を見る視線が、教室の外から響く不穏な騒動に向

かった事実を認識し損ねていた。

「お、いたいた。遊ぼうよタケミっち！」

「え、あの授業……」

「おー、輝夜あ！ タケミっちいたぞー」

教室前方のドアを躊躇なく開き、威風堂々と入室したのは佐野万次郎。彼は教師の言葉も何のその、聞く耳持たずにタケミチの下へ向かう。

続く龍宮寺堅は入り口で立ち止まり、背後を向いて呼び掛ける。

その呼び掛けに反応したのはタケミチ、万次郎、堅を除外した全員であった。

「え……いま輝夜って言った？」

「あの人たちって東卍のトップの人、だよな……？　じゃあ輝夜って」

「あれマイキーくんとドラケンくん……だよな？　じゃあ輝夜ってやつば」

「うそだろまじで!?　来てんの!?　ここにあの人が!?!」

「うそそうそやばいやばいやばいどうしよう!?!　今化粧してない!」

「し、心臓が痛え……ど、どうしよこれ、さ、さ、ささいん」

「そ、そうだサインだ色紙!　誰か色紙よこせよ!?!」

「こ、これ!　ノートに」

「ざけんたてめえ!　輝夜姫にノートなんかサインさせたらぶつ殺すぞ!」

「写真！ 写真だよ！ 姫は女子なら一緒に写真撮ってくれて聞いたよ！」

「な、なあ？ てかいまさ、マイキーくん……タケミちつて、花垣のこと？」

阿鼻叫喚の様相は件の教室だけに留まらない。

今は授業中であり、不良が所属しているようにも学校は学校だ。

大半の生徒は静かに授業を受けており、そんな中で声の響く廊下へ向け、ドスの効いた大声で呼び掛ければどうなるかは考えるべくもない。

「きやああああああああ！ 輝夜姫！ 生輝夜姫ええええ！」

「うそ本物!? 本物よ!? ありえないんだけど!？」

「ホントに人類？ あれ人類？ わたしたちあの御方と同じ人類なの？」

「髪が輝いてない？ なんで!? てか顔ちつさ肌白スタイルエゲツな！」

「やべえ……おれ見ただけで、勃っち」

「おいバカ、女どもに殺されんぞ!？」

「それ以上はやめとけ！ 気持ちに分かるがクラスの女子全員にリンチされんぞ」

平穏な日常は唐突に崩れ去った。

しかし、己の世界で思考に耽るタケミチは気づけない。

いまだかつてないほどの集中力を発揮する彼に、あれほど騒ぎ立てていた教室内の面々は今やハラハラとタケミチを見つめていた。

今現在、教室の状況的にはヤバい暴走族の総長からの呼び掛けを、クラスメイトの不良がガン無視を決め込んでいる構図だ。

「タケミッチー！ おーい？ ねえ無視？ 訊いてんだけど？」

（オレの知ってる過去と違う？ ここは……過去じゃない、とか？）

すぐ隣へ立つ万次郎に気づかず、タケミチは机で頭を抱えた。

（いやいやいやまじで勘弁してくれよ!! 過去じゃなきや何処だよ！ でも蓬萊山輝夜なんて知らねえし………ああもう訳わかんねえよおおお）

「こいつなにしてんの……？」

タケミチを不思議な生物を観察するかのごとく見下ろす万次郎。そんな彼に気づかず、奇怪な動きで頭を悩ませるタケミチ。教室外の騒動を他所に、教室内には奇妙極まる沈黙が続く。

そんな二人を入り口から見つめていた堅は、終に進展しない状況へ痺れを切らせ、動き出そうとしたところで体勢を崩された。

「うお!! オイいきなり、まあいいけどよ……」

「ちよつと万次郎、いつまで待たせるつもりなの？ 見つかったならさっさと行くわよ。もうここ鬱陶しくてかなわないわ」

下手人は当然輝夜だ。

教室の入口を塞ぐ形で立っていた堅を押し退け、不機嫌具合を隠そうともしない彼女は堅以上に痺れを切らせていた。否。より正確には、輝夜は我慢のベクトルで痺れを切らしたのではなく、怒りのベクトルでキレていた。

その怒りに中てられた教室内が凍りつく。先までは「サインだ」「写真だ」と騒いでいた全員が、いまや息を殺して微動だにしない。したくとも、出来ないのだ。

それほどまでに彼女の発するオーラは強く、鮮烈であった。

都内ないし関東圏で『蓬萊山輝夜』の名は、それこそ赤子も知るほどの知名度を誇る。なればこそ、彼女に関して様々な情報が大衆へと伝わっていた。

美貌。頭脳。運動神経。学業成績。趣味趣向。生家の財力に権力。それらすべてがたとえ噂でしかなくとも、蓬萊山輝夜を語るにあたっては、万人が常識的な基本情報として把握している。

ゆえに当然、輝夜が『東京社会』の一員にして、あまつさえ参謀副総長であり、不良少女を地でゆくクイーン・オブ・アウトローである事も周知されているのだがしかし。大半の人間はその意味をただしく理解できていない。彼ら彼女らの多くは輝夜の美貌に重きを置き、不良部分に関しては何詮詮が噂と軽んじていた。

その結果。輝夜の放つ覇気の中てられた者たちは、おおよそが今現在の教室にいる生徒たちと同じような状態へと陥るのだ。

閑話休題。

「ん。けどタケミっちがさー」

輝夜の怒気に無反応な万次郎は、眉尻を下げてタケミチを指差す。

其処には未だ百面相を晒す珍妙な不審者がひとりいた。

輝夜の不機嫌を隠さぬ美貌が、呆れの美貌に変わる。

「……………アタマでもひっ叩けばいいんじゃないかしら」

「おっけー」

万次郎の軽い返答に続いた打撃音。それは彼の言葉と動作に反して、ひどく重々しい一撃であった。

結果。

「ふべしやあ!?!」

頭頂部を鋼の拳に打ち抜かれ、机にヘッドバットをかます形と相成ったタケミチは意識を容易く手放した。

万次郎は無視され続けたことが気に触っていたらしい。

## 蓬萊山輝夜に成りました。 3 / 2

「おはよう。行くわよ」

「え、は、え？ 蓬萊山輝夜？ え、なん、つかあたま痛あ!？」

気づけば其処に東京卍會のトップが三人いた。

今のタケミチの心境はそれに尽きるであろう。が、輝夜にとつては心底どうでもいいことである。

彼女は花垣武道に興味関心をもてども、配慮するほどまでに気に入っている訳ではない。ただ興味深い、あるいは珍生物を見つけ捕縛したのでちよっかいを出す。

現状、その程度の認識しか持ち合わせていなかった。

「遊ぼうよタケミッチー！」

万次郎たちのやり取りを背後に輝夜は教室を出てゆく。

途端に突き刺さる好奇の視線を無視してやり過ごし、声をかけようと近づいてきた輩には冷徹な視線をお見舞いする。

それでも挫けずにやってくる者、とかく不良に対する応答は単純だ。

「よおお姫さぎやああああ、げあ!？」

「ほんと、不良の多い学校って嫌になるわ」

脛に一撃トーキック、からの下がった顔へトーキックだ。

余談として彼女のブーツは底に鉄板を仕込んだ安全靴式であり、その攻撃力たるや『無敵のマイキー』に比肩するとさえ言われている。

「あの、マイキーくんにはドラケンくん……蓬萊山さんが襲われて、いや襲って……？ それにそこらじゅうで伸びてる人たちはいつたい……なんスか？ コレ」

「あ？ コレ？ このゴミ？ ムカつくから来る途中に全員ノシた。意識ねえのはあーやって輝夜にちよつかいかけたカス」

「タケミつちさ、「蓬萊山さん」って、それ言いづらいっしょ？ 輝夜のことにはホーライさんでいーよ。それか姫ね」

三人の会話を他所に、輝夜はひとり優雅に進む。

背後で行われようとしている『遊び』にはてんで無関心だ。

「よしオマエら全員ここに一列でならべー、うつぶせで。あ、輝夜がやった意識ねえ奴らは放置でいいわ」

『え……？』

堅の言葉を皮切りに、ノサれた十数人の不良たちは疑問符を浮かべながらも行動する。廊下に、一列に、さながら吊り橋の底板がごとく寝そべった。



「おいおい、離れすぎつと痛えのはオマエらだよ?」

『オレたちなにされんの……?』

それは俗に人間カーペットと呼ばれる。

勝者と敗者を、上と下を明確に誇示する不良界限のお遊戯だ。

そうして、

「おぶっ!?!」

「ぐぐえ!?!」

「いっづ!?!」

万次郎と堅はひとりひとりの背中を、敢えて軽く飛びながら歩いてゆく。足元から上がるうめき声に笑顔を浮かべ、なんてことはないといった風に会話する。

それが彼らの日常であった。

「そーいや神泉で宇田川の連中が幅利かせてるらしーよ。輝夜が言ってた」

「うげっ!?!」

「ぎゃぎ!?!」

「ちようどいいじゃん! 輝夜のストレス発散もかねてぶっ飛ばしに行こうよ」

「どうぶ!?!」

「ほげあ!?!」

血と暴力。痛みと愉悅。己の力が物言う世界。腕つぶしと仲間の力で好き勝手に生きるアウトロー。その中であつて群を抜き出た連中。それこそが東京社會であり、その中核を成す三巨頭が二頭、佐野万次郎と龍宮寺堅であつた。

そこへ輝夜が混じらないのは男に興味がない部分も大いにあるが、それ以上に被虐趣味の変態が増産されかねないからである真実を知る者は少ない。

「タケミつちチャリある？」

「え、いやないツスけど……あのどこ行くんスカ」

昇降口へ着いて間もなく。

律儀に靴を履き替えていた万次郎と堅に反して、土足のままであつた輝夜はロツカーに寄りかかりつつ三人を待っていた。

その手にはいつもの愛機、桃色カラーのP〇Pはない。

代わりに握られているのは薄桃の携帯端末であつた。

輝夜の夜色の双眸はディスプレイへと釘付けられ、白魚のごとき指先がダイヤルボタンを上を忙しなく滑らかに泳ぎ回っている。

その姿からは昨日のタケミチに対する興味関心が感じられない。

「じゃあタケミつちはオレのチャリ漕いで」

タケミチの肩へ腕を掛けて堅が言う。

未だ状況理解の追いつかないであろうタケミチはされるがまだまだ。

「よっしや行こうぜ神泉！」

「あ？ 四人で行くの？ タケミッチ平気？」

「え、あの神泉になにしに……？」

準備を終えて口火を切った万次郎を先頭に、堅に肩を組まれたタケミチとふたりが続き、携帯端末を注視したままの輝夜が踏み出そうとしたときであった。

「ちよつと待って！」

昇降口に女声が響き渡り、四人が一斉に振り返る。

「あん？ 誰だオマエ？」

「ひ、ヒナ!？」

「なにタケミッチ知り合い？」

「……敵意があるみたいだけれど万次郎、堅？ あなたたちあの娘になにかしたんじゃないでしょうね？」

四者四色の反応を意にも介さず。

ミディアムボブで可憐な茶髪の少女は、肩を怒らせ踵を鳴らして歩み続けた。一直線にまっすぐと、学ラン羽織る万次郎へ。

「ごめんヒナ……今日立て込んで、明日なら」

そこでもうやくたくেমいちが動いた。

堅の腕組から四苦八苦しつとも抜け出して、頭を掻いて謝罪する姿は少女を氣遣つて  
いることが十二分に窺える。が、彼の言葉はほかならぬ少女の行動によつて塞き止めら  
れた。

「……………」

少女は万次郎の前で立ち止まると眼光鋭く睨めつけて、たくেমいちへは目もくれずに  
堅、輝夜の順に睥睨してゆく。

刹那、横薙ぎ一線。

少女は眼前の万次郎の頬を目掛けて片腕を振り抜いた。

響く炸裂音は鮮烈で、その威力が周囲へも十分に伝わる。

紛れもなく本気の一撃であつた。

「ひ、ヒナさああん!? なにやつてんのおお!?!」

「…………… のガキ」

「あら痛そう。ふふ」

そんな少女の行動にたくেমいちが顔を青白く染めて叫び、堅の額には青筋が浮かび蟬谷  
が痙攣している。しかし輝夜だけは先までの不機嫌が幻のごとく消え去り、口元を袖口  
に覆つて妖しく微笑んでいた。

その妖艶なる微笑みを直視してしまった遠巻きに覗く野次馬たちは、男女問わず文字通りに心を蹂躪されてゆく。いまの彼ら彼女らは一種の催眠に近い恍惚状態にあり、人によつては輝夜からのどのような命令であれ従う傀儡も同然であつた。

果たして、それがどれほどまでに恐ろしい事であるのかを世界はまだ知らない。

輝夜の教育係、八意永琳は言つた。「気づいたときには手遅れで、世界の致命となるでしようね」と、世界でただひとり輝夜の恐ろしさを理解する天才は咲つた。

閑話休題。

「タケミチくん、行こう！」

「え？」

叩かれてからただただ沈黙を貫く万次郎を他所に、凜々しい表情を浮かべた少女はむんずとタケミチの腕を取つて歩きながら言う。

「こんな人たちの言いなりになつちやダメだよ」

言つて「ヒナが守つてあげる」と続けた少女の手が震えている事实に、輝夜の笑みは増すばかりであつた。

「……ヒナ、手が」

輝夜が目敏いとは言え、横目に見ていた彼女が気づくのだ。

当然、腕を取られたタケミチがその震えに気づかぬ道理はない。

ここまですればどれほど鈍い人間であれ、状況理解も追いつくであろう。つまり少女は強気なのではなく、虚勢を張った小動物に過ぎないのだと。そしてそれこそが、少女が輝夜をそそつてやまない理由でもあった。

「オイ……殺すぞガキ」

ゆえに同性紳士たる輝夜は、普段ならば絶対に許容しない堅の暴拳を見逃す。細く瑞々しく汚れ知らずな少女の腕を、無遠慮な野郎が鷲掴むという暴拳をだ。

これがいつも通りであつたのなら、女性に手を出そうとした時点で輝夜は躊躇躊躇いなく堅を沈めに襲いかかつていた。そうしないのは偏に、少女の怯えながらも必死に戦おうとする愛くるしい姿を、少しでも長く愛でていたがためである。

「うちの大将いきなりぶん殴つてハイ、サヨナラつて？ ふざけんよコラ」

堅によるドスの効いた恫喝に、少女の肩が幽かに跳ねて手の震えが増す。それに比例するようにして、輝夜の口端も吊り上がってゆく。

もしも輝夜が腕を覆うほどに長い袖口で口元を隠していなければ、周囲は彼女の悍ましいほどに美しく歪んだ狂貌を目にして恐怖を覚えていたはずだ。

「ふざけてるのはどっちですか？」

「あアん？」

輝夜の耳に女声が届く。

先に四人を呼び止めたような、大きな声ではなかった。

少女らしい澄んだ声で、それでいて強い意志を宿した声だ。

「他校に押し入って無理矢理に連れ去るのは友達のことじゃありません」

「ご尤もだと輝夜は無言で頷く。

同時に花垣武道が友人ではない事実を告げようとして、やめる。

我儘放題で自由奔放な輝夜も空気は読めた。

「最近のタケミチくんケガしてばかり……もし、もしもそれがアナタたちのせいだつて言うなら、私が絶対に許しません」

静かな声であった。

そして、力強い言葉であった。

少女の意思が、思いが、伝わったのであろう。

「おい」

「あ?」

花垣武道が、龍宮寺堅の肩を鷲掴む。

「その手、離せよ。バカ野郎!」

「! テメエ……」

昨日と今日。輝夜たち三人とタケミチは、合わせて一時間にも満たない付き合いだ。

両陣互いに相手のことなど大して知りはない。

それでも、花垣武道という少年が、『東京卍會副総長』の『ドラケン』と呼ばれ恐れられている堅に対し、食ってかかる度胸はないと判断を下していた。

万次郎が、堅が、聡明な輝夜ですらそうだ。

タケミチの覚悟はもちろん知っていた。

三人共にその目で見ただけから。

しかしそれは、譲れぬナニカのためだけである事も理解していた。

ゆえに、輝夜だけがいち早く気づいた。

(そう……彼女があなたの執着<sup>執</sup>するモノ<sup>念</sup>なのね)

昨日。

ひとりの中学生が己の命を賭してまで執着<sup>命</sup>したモノ。

執念の果てに生まれ落ちて苦しむ輝夜が、無意識にナニカを求めてしまった対象の、その核たるモノがいま目の前に在った。

「誰に向かつて口きいてんだア!? オイ、こ」

「もう二度と!」

昇降口を怒号が震わす。

震わせたのは、堅の言葉を割った花垣武道であった。



「譲れねえモンがあるんだよ！」

「……は？ 二度と？」

輝夜には聞こえた。

譲れない少女の命があるのだと。

輝夜には視えた。

己が死んでも絶対に譲らないという執念の業火が。

輝夜には感じられた。

花垣武道の放つ尋常ならざる情念を。

「あつはあ」

狂氣的で艶やかな嬌声を零す輝夜の中を言い知れぬナニカが這い回る。

黒いそれは同族嫌悪の念か。果ては同族を見つけた歓喜の念か。あるいはそれは理解者を見つけた喜びかも分からないがしかし。

「あーあ。せっかくダチになれると思つたのに……ザンネン」

状況は輝夜を置き去りに進む。

動いたのは、堅ではなく万次郎であつた。

「さて、どうやって死にてえ？」

今の今まで不動不干渉を貫いていた、万次郎の常軌を逸した殺氣に中てられ、タケミ

チの肩が跳ね上がる。

東京卍會総長『無敵のマイキー』が放つ殺気は常人のモノとは格が違う。並の者では言葉すら返せず、心弱き者は失神すらしかねないのだ。

それでも、タケミチは退かない。

彼は退くどころか前に一步を踏み出し、力強く宣言した。

「一っだけ約束しろや！」

「ん？」

「ヒナにはぜつてえに手え出すなよ！」

近づきながら拳を構える万次郎に、闘志に満ちた瞳を向けるタケミチ。

両者の接触を秒前にして万次郎は言い放つ。

「は？ 知らねーよ。死ね、」

瞬間。

「なーんてね」

「……………へ？」

万次郎は殺気を収め、笑顔でタケミチの前にいた。

その顔は愛嬌に溢れ、とても暴走族の総長とは思えないものだ。

「バツカだなータケミッチ。女に手え出すわけねーじゃん」

背を向けながら万次郎が言う。

「足取りは軽く、初対面であろうとご機嫌であることが一目瞭然であった。次いで。」

「タケミつち……オレ相手に凄んだな？」

「す……すいません」

堅がタケミチの肩に腕を回し顔を寄せる。

その表情は穏やかであり、先までの怒気はまるでなかった。

「いいよ。「譲れないモンがある」って、今どき女にそれ言うやついねえぞ？ 昭和だな」

堅とタケミチのふたりの会話を耳に、これ幸いと感情のうねりを収めた輝夜も動きだす。

行き先は当然一つ。

凜々しく虚勢を張った小動物にして、輝夜の琴線に触れた少女だ。

「うちの男どもがごめんなさいね。小うさぎちゃん？」

「ふえ!! あ、あのもしかして私すごい勘違いを」

優雅に優しく声をかければ、慌てふためく少女へ向けて、輝夜は自身が極上と信じてやまない微笑みを向ける。

反応は、激的であった。

「してはうあ!？」

「ふふふ、気にしなくていいの。あなたはなにも悪くないわ」

頬を越えて額に耳に、終には首まで朱に染めた少女。彼女のありきたりな手応えを示す反応に、輝夜の笑みがぞつと深まる。

その意味を身をもって正しく理解する堅が、目敏く輝夜の行動を見つけタケミチに耳打ちした。

「タケミつち……オマエのヨメ、早く助けねえと輝夜に持つてかれつぞ?。」

「……へ? それつてどういう」

声を大にして言わないのは、輝夜のナンパを邪魔した場合に生じる報復行為を警戒しているからに他ならない。

「あーまじで知んねーの? 輝夜のウワサ」

「ホーライさんの……ウワサっスか?。」

「女好き」

「え? 女好きつて……だつてあのひとも女で」

曰く、蓬萊山輝夜は極度の同性愛者である。

曰く、その美貌をもってノンケであろうと落とすナンパ師。

曰く、この世に蓬萊山輝夜の落とせない人間はいない。

曰く。曰く。曰く、同性で子を成す手段を持つている。堅は語り続けた。

数々の輝夜姫にまつわる都市伝説を。

タケミチは青褪めてゆく。

数々の輝夜姫にまつわる破天荒な噂話に。

そして、堅は告げた。

「これな、ウワサってことで片付けられてんだがよ？ 大の女好きで女を落とす百発百

中のナンパ師っつー部分、これガチなんだわ」

「え」

「けど言いふらすなよータケミッチ」

じゃあ頑張れ、そう締めくくって堅は去る。

タケミチの首がブリキのおもちやがごとく回り、見た。

「そう、ヒナちゃんはがんばりやさんなのね。ほんとうにいい子」

「えへへ。そんな、私なんて」

「私なんて」は言っちゃダメ。それにあなたは素敵でとてもすごい子よ？ 大好きな人

のために勇気を振り絞って立ち向かうなんて、早々できることじゃないもの」

「そ、そうですかね？」

「ええ、胸を張りなさい。武道くんが羨ましいわ、こんなに素敵な女の子が恋人だなんて……私、嫉妬して泣いちゃいそうよ?」

「ええ!? 輝夜さんにそんな、私」

「ふふ、嘘よ。冗談。けどそうね……もしも次にこんな事があつたら、自分で立ち向かう前に私に電話しなさい。今日は相手が万次郎たちだったからいいけれど、中にはとても怖い人たちだっているのよ? だから、困ったり助けて欲しいときはすぐに私に言つて? どこへだつてヒナちゃんのためなら飛んでいくから」

「か、輝夜さん………」

噂の人物、蓬萊山輝夜によつて壁際へと追い込まれ、壁ダンススタイルで全身が朱に染まる彼女の姿を。橘日向のいまだかつて見たことがない、純情可憐な乙女の表情をタケミチは見た。

「……………ヒナあああああ!?!」

昇降口に花垣武道の絶叫が響き渡つた。

## 蓬萊山輝夜に成りました。 4 / 1

唸る重低音。迸るフロウ・アンド・ライム。狂ったように暴れ回るレーザー光線とスポットライト。フロアには誰かも知れない男と女が踊って叫んで酒を飲む。

それを「足りぬ」と煽って歌うはステージ上のマイクスター。

ビートを上げるとスターが言う。

テンション上げるとスターが叫ぶ。

会場が、空間が、爆ぜた音の嵐に揺れ動く。

男が笑ってステツプを踏み、黄色い悲鳴が湧き上がる。

女は得意気に腰を振り、周囲の視線を奪ってゆく。

酔わない者など不在りはしない。誰も彼もが空気に酔いしれるそこは渋谷の神南。若者の遊び場が一つ、『Club Ibuki』の名で知られる会員制のナイトクラブであつた。

足を踏み入れるのは当然『らしい身なり』の者ばかりであり、『暗黙の了解』とも言えるドレスコードをみなが守っている。

定められたからではない。

そうあるべきだとみなが認識しているのだ。

「盛り上がっているわね」

輝夜はそんな場所へ、VIPとして足を運んでいた。

フロアで踊り酒を飲みかわす一般客とは違う。

二階のVIP専用のVIPルーム、その展望席だ。

其処は一般会員が決して足を踏み入れることの出来ない、床と三方がマジックミラー張りでフロアを一望できる特別席であり、なおかつ利用するには巨額の富を必要とされる部屋であった。

輝夜はそのVIPルームの中央に敷かれた真紅のカーペットの上。さながら玉座のごとく置かれた革張りのソファにひとりくつろぐ。

ソファの前にはシンプルでいて格調高いガラス細工のテーブルが一つある。その卓上には各種フルーツの盛り合わせやナッツ類が上品な器で並び、未開封のボトルと返されたグラスが見本品のようにセツトされていた。

それはつまるところの輝夜がなにごととして手に取っていない証拠である。同時に、彼女がこの場へと長居する気がいつきないことも意味していた。

「輝夜、入っていい？」

フロアと完全に遮音された部屋の外。部屋唯一の出入り口に設置されたドアフォン



越しに、機械混じりの音声<sup>ボイス</sup>が輝夜を呼ぶ。

その音声に彼女は視線をやることなく答えた。

「ええ、どうぞ」

瞬間。

輝夜の返答へ応えるようにして開いた扉から、音の濁流が怒涛の勢いで流れ込む。静寂を押し流してゆくクラブミュージックは、和を愛する彼女の趣味趣向にはとんと合わないものであった。

「……よくもまあこんな大音量で、耳は大丈夫なのかしら」

なればこそ、輝夜にはフロアのみながノる音楽は騒音以外のなにものにも聴こえず。彼女の誇る黄金比率の美貌が幽かに歪み、言外に不愉快であることを物語っていた。

「アツハハ、大音量って轟音<sup>トーン</sup>フカす輝夜がそれ言っちゃうんだ」

扉がひとりでに閉まり静寂の戻った部屋で輝夜のぼやきに答えたのは、東京社会の特攻服に身を包む虎色ヘアの少年。首からも虎柄のタトゥーが覗き全身で虎を主張する少年は、右手に一人を引きずり左肩に一人を担ぐ、計二人の人間を運びながらもヘラヘラ笑って輝夜の前へと歩み出る。

そうして、連れ込んだふたりをゴミのように投げ捨て言った。

「はい、コレが神南<sup>カミナミ</sup>で調子こいてたツートップ」

「へえ、それはそれは……苦勞さま一虎」

瞳を細めて薄笑う輝夜は、勞う羽宮一虎へ見向きもせず続ける。

彼女の視線はガラステーブルの向こう側。横たわり苦しげに呻くだけの、血に汚れた傷だらけのふたりへと注視されていた。

「さて、来てくださってどうもありがとう。会えてとても嬉しいわ」

優しく自愛に満ちた聖母のごとき声音で輝夜は言う。

されど声音に反してひどく凍えた人間味を感じさせない夜色の瞳に、身内である一虎の頬を一筋の汗が伝い落ちてゆく。

輝夜の瞳が人間を見ていない事実を一虎は知っていた。

「ほんとうに、ほんとうに会えてとても嬉しいのよ」

そう言つて笑みを深めた輝夜はソファから立ち上がると、足音を立てずに優雅な所作でガラステーブルをゆつたりと迂回しながら口開く。

「このころは 比者 ちとせやゆきも 千歳八世裳 すぎぬると 過与 われかしやおもふ 吾哉然念 みまくほりかも 欲見鴨」

輝夜の美声で流麗に紡がれたのは万葉集が一首。彼の書に数多くの和歌を残した偉人、大伴坂上郎女による恋情の歌であった。

「きつと大伴坂上郎女もこんな気持でこの詩を詠んだのね」

その意味するところは「私はこのごろ千年の時を待ち遠したように思います。ああ、

あなたに逢いたい」である。

無論、これは輝夜による盛大な皮肉だ。

彼女が男に恋い焦がれることは永遠になく、和歌や古典文学を愛好する輝夜が詩の意味を違えることもない。

「あなたたちもそうは思わなくて？」

クスクスと忍笑う輝夜の声に、倒れたふたりが顔を上げる。

そうして四つの瞳に映り込んだのは、軍人。某国の親衛隊 Schutzstaffel を彷彿とさせる、漆黒の麗人であった。

黒のワイシャツにきっちり締められた黒ネクタイ。膝下まである黒の上着はすべての釦が閉じている。腰元にはしっかりと黒革のベルトが巻かれ、ゆるりと膨らむ胸元では『天上天下唯我独尊』の文字が、右腕には『暴走軍愚連隊』、左腕には『初代参謀副総長』、そしてその背中には『初代東京軍會』の金の刺繍が輝いていた。

上着の裾下からわずかに覗く黒のボンタンは、黒革のロングブーツに隠れてほぼ見えない。加えて彼女は黒革の手袋まではめており、まさしく全身が黒一色。肌色の見える場所が顔以外にはなく、黒髪も相まって白磁の美貌がよりいっそうと際立つ。

『東京軍會・初代参謀副総長・戦姫の輝夜』

またの名を『輝夜姫』が、戦装束をまとい其処にいた。

笑みを湛えて、嬉しげに、楽しげに、風雅を装う。

その瞳はどこまでも暗く、奈落を想起させてやまない。

「……ねえ。聞こえていて?」

輝夜の静かな呼びかけに、這いつくばるふたりの肩が跳ねた。

中学三年生の少女よりも明らかに年上であろう、成人を迎えているかもわからない大の男たちの瞳が滲む。

「なん……で、お」

輝夜の圧に耐えかねたのか、ぽつりと男のひとりが口開く。

震えで噛み合わせが悪く、言葉はたどたどしく覚束ない。

「……、「なんで」なにかしら?」

輝夜は一步、問いながら言葉を発した男へ寄る。

その距離は、彼女の足が男の頭を潰せる位置取りであった。

星一つ見えない夜空の瞳が、涙ぐむ男の瞳を覗き込む。

「な、なんで、おま、東ま、が……か、かわ」

「ああ、あなたたち……自分がここに理由を理解していないのね」

断片的な男の言葉に、輝夜は納得顔で笑みを深めた。

そこから好意や友好を感じられない。

男たちの震えが増してゆく様を、一虎が呆れ顔で眺めていた。  
「そうね、そうよね。わからないと怖いわよね」

しげしげとひとり頷いて、輝夜は右手の人差し指を立てた。

そして、一言。

「小野ヶ崎春恵」

沈黙していた男の肩が、わずかに反応するがしかし。

輝夜は次に中指を立て、ピースを作つて続けた。

「上南宇江弓子」

そうして順々に、輝夜は指を立てて女性の名を上げてゆく。

ゆつくりと、知らしめるようにして名を上げる。

右手では足りずに左手を、それでも足りずに折り返す。

その指が一本上がるたびに、その指が一本下がるたびに、蓬萊山輝夜という少女の中から、人としての大切な熱が消えてゆくような錯覚を一虎はひとり覚えていた。

「御瀧園彩」

二十三人目、そこでようやく輝夜は手を下ろした。

VIPルームに痛いほどの沈黙が広がる。

男たちは上げ連ねられた名に心当たりがあるのかないのか、輝夜の視線を避けるよう

にして頭を垂れて震えるだけであった。

「クラブ」

ため息一つ、輝夜は次に単語を並べだす。

ナンパ。カラオケ。ボックスカー。公園。廃ビル。次々と淀みなく上がる単語に私たちはただ震え、ふたりを見下ろす輝夜は淡々と続けてゆく。

その内容は徐々に物騒加減を増し、彼女は終に核心を口にした。

「強姦、集団暴行、薬物強制投与……まだ、足りなくて？」

雅やかな少女の口から零れた言葉は、私たちの悪行のすべてを物語っていた。

蓬萊山輝夜や羽宮一虎のような暴走族とは違う。

彼らは神南を中心に都内で女性を襲い、動画と写真をネタに売春行為や性的奉仕を強要する性犯罪グループの中心人物であった。

きつかけは輝夜が友人から受けた相談だ。

曰く「生真面目な友達が見知らぬ年配の男と連日合っていて、しかも相手が毎日違う」というものであり、「日に日に顔色も悪くなっているし、深夜に遊び歩くような娘じやないのに今も電話を片手に寮を出ていってしまった」という内容であった。

当然、仲の良い同性からの相談に輝夜は即時行動を起こす。

それが7月7日をまたぎ8日へ入った深夜のことである。

そして輝夜は迷わずに情報を求めた。

求め先は彼女が「イナバ」と呼んで重宝している、都内在住の蓬萊山輝夜を信奉する信者たちである。

その数は優に500を越え、深夜にもかかわらず輝夜の出した「情報求む」の一斉送信へ、多くの信奉者たちが我先にと応えた。

結果、輝夜は日付の変わった7月10日の深夜。すなわちほんの一時間前まで携帯を片手にディスプレイと睨み合い、そうして集まった情報を元に仲間を引き連れ『C i u b I b u k i』へと愛車を乗り付けたのである。

「そう……。あなたがそこにおいて、私たちがここにいる理由はあなたたちよ。それを理解できたのなら次は、」

懺悔の時間よ。

そう言つて、微笑む輝夜は男の頭を目掛けて足を踏み降ろした。

## 蓬萊山輝夜に成りまして。 4 / 2

汚れる黒革のブーツで血振りした輝夜の表情は浮かない。

彼女は血溜まりに沈むふたりの男を足蹴にぼやいた。

「……さて、どうしたものかしら」

輝夜による懺悔と称した尋問、否。拷問とも呼べる徹底的な情報収集を目的とした暴力の前に、喧嘩もろくに出来ないであろう男たちが果たして口を割らずに耐え忍ぶことは可能であろうか。

無論、不可能である。

断金の仲間意識や友のためと殉じる覚悟があれば別として、彼らは自分たちよりも力に劣る女性を集団暴行していただけの鬼畜外道な人間性を持つ人種に過ぎない。

他者を思いやる人道精神など持ち合わせる訳がなかった。

なれば必然、我が身可愛さに口を割るのは自明の理であろう。

少なくとも輝夜はそう思っていたのだ。

例え反骨精神をみせても『歯の二、三本も押し折れば』『鼻を潰してしまえば』『指の骨を一本ずつ踏み砕いてやれば』すぐに吐くであろうと、そう思っていた予想は外れた。



「誰とも知れないやつに「メールで指示された」……ねえ？」

滂沱の涙ながらに「やめてください！ ホントなんです！ 信じてください！ 許してください！」と懇願し続けた男ふたりは、最終的に輝夜の振る舞った暴力のフルコース・デイナーをすべて平らげて失神した。ついで「メールの相手に従った」以外の、目ぼしい情報を零すことなくである。

「チンコロは絶対しない！」ってタチでもないでしょコイツら」

「……ええ、」

輝夜の疑問符に一虎が言う。

「そうね……。少なくとも男としての機能を、種の繁栄に貢献する権利を、それこそ生涯失う瀬戸際にまで口を噤めるタチでないことだけは確かだよ」

一虎に答えつつ、輝夜は思い返す。

薬物の入手ルートはありきたりなコインロッカー。メールで指示された場所に鍵があり、それを使って彼らはクスリを手にしていた。

犯行に及んだ場所も同様だ。

カメラの位置と死角の記された地図がメールに添付されていた。

それ以外にも警察のその日の警邏ルート。取り締まり場所。警察の目の届かない路地情報や、時間によっては人通りのいつさいなくなる通りの廃ビルに公園の住所。果て

は狙い目である女性の顔写真に行動範囲まで、親切丁寧に彼らの携帯電話へとメールで送られてきていた。

「……嫌になるわね。見てみなさいよ一虎」

そして、もう一つ。

輝夜は不満気に弄っていた男の携帯を一虎へ向けた。

「……………うん？」

そのディスプレイに表示されているのはメールの受信一覧であった。

表示方法をアドレス詳細に切り替えられたそこには、ディスプレイがアルファベットで埋め尽くされた見難い光景が広がっている。

そんな黒革に包まれた手の中にあるディスプレイを眺めて数秒。一虎はよくわからないと首を傾げて、大きな瞳を瞬かせながら輝夜へ問う。

「これがどうしたの？」

「このメールはすべて同じ……そうね、『X』が送ってきたメールよ」

X、輝夜はメールの送り主たる黒幕をそのように仮称した。

そうして彼女に言われもう一度、一虎はディスプレイを覗いて気づく。

「……………あれ、でもこれアドレス全部違うじゃん」

「そう。それに使い捨てよ……おそらく端末もプリペイドね」

その意味に、輝夜は瞬時に辿り着いていた。

Xによる追跡防止措置だ。犯罪が露見し黒幕である自身の存在を察知されようとも、警察の端末情報を辿った捜査から逃げ切るための一手である。

西暦2005年の今現在。『向こう側』の事情に多少詳しくければ、あるいは『向こう側』に多少の伝手さえあれば、使い捨ての端末。俗に言う『飛ばし携帯』なども手にするのと事態は容易なのだ。

「厄介よ、こいつ……いえ、こいつらかしら？ どちらにせよ知能犯ね」

「ふう〜ん」

Xは端から警察の手を見越して行動していた。

つまりバレることを前提に動いているのだと答えを出し、されど輝夜は己の出した結論に顔を顰めて考えなおす。

犯罪行為ゆえにバレる気はなくとも手を打つのは当然だ。

安全マージンを取るのは犯罪行為は言うに及ばず。

あらゆる危険を孕む行動で推奨されている事柄であった。

しかし、そこではない。

輝夜が引つ掛かっているのは別の部分だ。

「……Xの目的は、なに？」

「……？ 女の子でしょ」

思わず零れた輝夜の自問自答の呟きに対する一虎の言葉へ、彼女は首を捻る。

「だとしたら手が込みすぎよ」

「まあ、確かに」

輝夜にはXの目的が見えないでいた。

行動原理や理念がまるで窺い知れず、実行犯を捕らえた今でさえ何一つとして理解が及ばない。

その言い知れぬ不快な感覚に、輝夜は頭を振るう。

「いいわ。今ここで考えていても得られるものはないでしょうしね」

帰りましようと言って、投げ捨てようとした端末が、震えた。

輝夜の瞳がディスプレイを反射する。

『件名：お望みの女子高生』

『添付：顔写真』

『本文：名前は優曇華院鈴仙。毎週金曜のバイト終わり、21時過ぎにひとりで某大学近くの公園を必ず通り、毎回公園内の自販機で飲み物を買う。あの公園にカメラはない。ひと目だけ気にすればいい。それと今回のターゲットは写真と動画を後日指定するコインロッカーに入れておけ。—END—』

一虎が一步、後退った。

額にはわずかな汗が浮かび、頬が若干引き攣っている。

そんな事実を露知らず、輝夜は添付されていた写真を開く。

そうして女子高生らしくロングヘアを薄紫に染めた、愛らしい少女の顔がディスプレイへと映し出された。

次いで、輝夜は手早く別のメール受信一覧の内容に目を通してゆく。

『件名：女子大生』

『添付：顔写真』

『本文：名前は小野ヶ崎春恵。Club Ibukiにひとりでいることが多い。帰りは徒歩で途中に裏路地を通る。明るいが深夜のその路地近辺に人はいない。カメラは壊れている。—END—』

『件名：OL』

『添付：顔写真』

『本文：名前は上南宇江弓子。土曜は日付の回る深夜まで会社。帰宅時は徒歩。会社近辺にその時間帯人通りはない。駅通りでタクシーを拾う前に車でさらえ。—END—』

『件名：フリーター』

『添付：顔写真』

『本文：名前は御瀧園彩。火曜日、神南のコンビニで深夜近くまでバイト。帰宅ルート上にある廃ビル（住所）近辺に人通りはない。カメラもない。廃ビルで待ち伏せて中に連れ込め。—END—』

順々に二十三人分のメール内容を見終えた輝夜はある仮説へ辿り着く。

Xの狙いは東京卍會ないし自分にあるのではないかと。

「……………、なら」

一蹴。

輝夜は足元に転がっていた主犯格の男を蹴り転がす。

仰向けになった男たちの顔は、目も当てられない形相であった。

それが二つ並んだ写真を、黒の特攻服がわずかに映り込むようにして撮り、彼女は今しがた届いたXのメールに貼り付けて送信する。

「帰るわよ」

返信は来ない、不思議と輝夜にはそんな確信があった。

そうして、携帯を投げ捨て彼女は歩き出す。

その後ろを慌てて追い駆ける一虎は、壁の衣紋掛から漆黒の絵羽織を手に取り、先を行く輝夜の肩に掛けて言った。

「いいの？ Xからの連絡だったんでしょ」

「どうせ応えやしないわよ」

一虎の間に鼻で笑つて、輝夜は扉を開け放つ。

瞬間。

押し寄せてきた音の濁流で彼女の眉間に皺が寄る。

先ほど流れ込んできた音楽とは明らかに違う、それ以上に激しく脈動する重低音の際立ったダークサイケ調に、輝夜の不機嫌は増すばかりであった。

「早く出ましよう。頭がおかしくなりそうよ」

「サイケデリックだけに？」

「そうよ」

一虎のおちよくるような言葉へ投げやりに、輝夜はフロアの二階通路を足早にゆく。道中、すれ違う若者たちの熱に浮かされた視線が輝夜へ絡むもいつものことだ。彼女は徹底して無視を決め込み、階段を下りいざ外へ踏み出した瞬間である。

「おや、もうお帰りかい？ 悪ガキ共」

ふたりの前を遮るように、黒のスーツを着込む女人は立ち塞がった。

その姿を目に、輝夜は不機嫌が幻であったがごとく微笑んだ。

「ええ、勇儀さん。今日はどうもありがとう。それと申し訳ないのだけれど、お部屋を汚してしまったのよ。清掃費はお支払いするから、お願いできませんか？」

「ああ、いいさね。ウチの若い衆にやらせるから気にしなさんな」

夜にも負けない波打つ金髪を掻き上げ、豊満な谷間を晒す星熊勇儀は笑う。

そんな彼女の快活な笑みに対し、輝夜は口元を隠し楚々と微笑み返す。

「まあ、こき使つては若い方たちが可哀想ですよ?」

「だったら汚すんじゃないよ! このじゃじゃ馬姫が」

「じゃじゃ馬姫つて……、私は勇儀さんのように弾丸飛び交う戦場を嬉々として遊び場にしたりはしないわ」

「いや、さすがの私だつて遊び場にやしないよ……。ただ喧嘩相手がチャカ持つてるのばかりでねえ……つたく、どいつもこいつも喧嘩の粹つてやつをわかつてないよ」

鼻を鳴らして拳を叩く勇儀の言葉に、輝夜はクスクスと笑い一虎が歪な笑みを返す。彼の笑みを言葉に表すのであれば、笑い方を知らないサイボーグが必死に笑みを浮かべて失敗したような顔である。

「ま、それはいいさ。それより」

勇儀のまとう雰囲気が変わった。

快活で人好きのする女性のものから、獰猛で人を食い殺しかねない女傑のものへ。血を魅せる瞳に陰呑な光を爛々と灯し、彼女は輝夜へ問う。

「シヤブを流したのはウチのもんかい……?」



嘘偽りは許さぬと、勇儀の瞳は言っていた。

無論、輝夜には真実を語る以外の考えはない。

「わかりませんわ」

輝夜のすました答えに、無言で勇儀の瞳が続きを促す。

それに首肯し、輝夜は事のあらましを語ってゆく。

嘘偽りなく、先に手にした情報を惜しみなく流していった。

都内で最大勢力を誇る反社会的暴力団組織のナンバースリー、『怪力乱神の勇儀』を敵に回す道理はないのだから。

「……………なるほどね。わかった、こっちでも探つとくよ」

「お願いします」

輝夜の話聞き終え、勇儀は懐から煙草を取り出し啜える。

その雰囲気は、最初の人好きするものとも違う優しいものであった。

そうして、

「アンタは女の子なんだ、無茶すんじやないよ」

「……………勇儀さんたちだけに言われたくない言葉ね」

肩越しににっと笑った勇儀は、紫煙をくゆらせ店内に消えてゆく。

それを見送った一虎は、ため息とともに力なく零した。

「オレあの人苦手なんだよね……」

「知ってるわ。それより早く行きましょう、みんな待ってるはずよ」  
輝夜は一虎の言葉に苦笑して、夜の闇へと踏み出した。

## 蓬萊山輝夜に成りました。 5 / 1

深夜の都会に機獣が咆えた。

曰く、異国帰りの怪物。漆黒の狂獣。鉄塊の悪魔。

1200ccエンジンは誇る145馬力を遺憾なく発揮したパワフル・アンド・クレイジービーストは、阻む物のない四つの獣口から怒髪天がごとき咆哮を轟かせていた。

「潰す、」

車の疎らな国道を弾丸さながらに、道行く酔いどれへとドップラー効果を与えて滑走してゆく黒塗りの悪魔。その背に跨がる輝夜の瞳が剣呑な妖光を放つ。

「必ず、」

もはや空気は風にあらず。

風圧が壁となった超速の世界を、輝夜は流麗に黒髪をなびかせ駆け抜ける。

「見つけ出す、」

彼女の右手首が言葉に付随する感情を表すようにして下がった。

瞬間、愛する主の感情へ応えるように機獣の咆哮が増す。

夜闇を照らす怪物の単眼が空を見上げ、美しい満月が輝夜の瞳へと映り込んだ。

「代償の一つも払って貰わないと割に合わないわ」

輝く月を見て薄ら笑った輝夜は、自慢の愛機『VMAX12』へ身を委ねる。

彼女は愛機に裏切られるとは露程も思っていない。

エンブレムに『卍』を刻み付け、専門家にフルチューンを頼み、輝夜のためだけに製造させた外装でフルカスタマイズされた至上の一品。注ぎ込んだ金額、否。愛は並の大人では注げぬほどに膨大だ。

ゆえにこそ、輝夜は己の愛機に絶対の信を置いていた。

事実、それを証明するように数秒の後輪走行の後。彼女の愛する怪物は満足したとでも言うようにして、空を見上げていた単眼で元の夜闇を見つめ直した。

「はい」

妖光を放つ輝夜の瞳が一瞬の間を慈愛で満たす。

その慈愛へ応えるように、機獣の咆哮の質が変わった。

次いで、超速の世界はさらなる超加速領域世界へと昇華してゆく。

「ほんとうにいいい」

スクリーンで覆われたスピードメーターが瞬く間に右へと振れた。

視界の両端風景は線となり、守りを持たない輝夜の耳を暴力的な風音が襲う。

本来その世界へ踏み込む前に、常人は死を見て逃げ帰る。

しかし、輝夜は違った。

彼女は鎌首をもたげる死の前を悠然と進み、その背後の扉を笑って通り抜けてゆく。一歩間違えれば即身成仏。ほんのわずかな失敗不運が即死を招く世界で、『死』を『識り』『蘇った』輝夜は『死』に恐怖を抱かず愛機と踏み込めしてしまう。

どうかしていると誰もが言った。

狂気の沙汰だと誰もが恐れた。

それを蓬莱山輝夜は、当然のこととしていた。

「あそこね」

数分の暴走を経て、輝夜は白亜の城を前方に見る。

四角張った城の頂上には電光文字で大きく『総合病院』と刻まれていた。

住宅地で囲まれた其処は静寂に包まれ、辺りに人影は窺えない。

そのような場所で、ただでさえやかましい1200ccの直管排気音を唸り轟かせながら、輝夜は白亜の門前に愛機を乗り付ける。

彼女に『押して歩く』という選択肢はなかった。

「カグ姉えー！」

機獣の咆哮が止み、ふたたび静けさを取り戻した深夜の空気に次いで響いたのは少女の大声。その唯一自身を「姉」と呼ぶ知った女声に、愛機から降り立つ輝夜は黒の絵羽

織を優雅になびかせ言葉を返した。

「千壽、時間と場所を考えなさい。ここは病院で今は深夜よ」

「え、ゴメン……。でも、ジブンよりカグ姉えのVMAXの方が、」

「私の方が、なに？」

「うん、ナンデモナイよ」

東京卍會の特攻服に輝夜とお揃いの絵羽織を羽織る、シルバードブロンドのボブヘアで整った中性的顔立ちの美少女。美姫たる輝夜と並び立ってなお霞むことのない明司千壽は、自身が「姉」と呼び慕う輝夜の笑顔に抗うことなく屈してしまう。

輝夜を絶対とする千壽は、輝夜の理不尽にも従順であった。

「そう？　なら詳しく報告してちょうだい」

「うん」

電話で事前報告を聞き苛立ちを隠さない輝夜に対し、千壽は頷き応えた。

事は一時間前の話である。

新宿を縄張りとする愛美愛主が、東京卍會の縄張りである渋谷で事を起こした。

目撃者兼当事者は千壽だ。

彼女は東京卍會の集会を終え、自宅へ向かう途中であった。

簡素な住宅街を抜けた、新宿との境界近くへ位置する公園内。日中はともかくとして

深夜にもなれば人通りはいっさいなくなり、街灯も少なく薄暗いその場所に千壽は喧騒激しい人集りを見つけた。

彼女にとっては耳慣れた、荒事による喧騒だ。

それを千壽は珍しく思いつつも、喧嘩を日常とするがゆえに大した興味は抱けず。不良同士のぶつかり合いなど見飽きていた彼女は、場所と時間が珍しいだけであるとしてあつさりを見逃した。

例え其処が東京卍會の縄張りであろうとも、其処彼処で頻発する荒事へ一々介入してはキリがないのである。

暴走族同士のせめぎ合いならばいざ知らず。チームに属してすらいないカタギの揉め事に、基本的に東京卍會の面々は関わらないのだ。

カタギや女子供相手に、絶対に此方側から手を出すな。

それが佐野万次郎を筆頭に蓬萊山輝夜と龍宮寺堅の三巨頭が起てた、東京卍會における数少ない鉄の掟であった。

千壽はその中でも幼馴染兼姉たる輝夜の言葉には絶対忠実だ。

同じく幼馴染の万次郎の言葉には舌を出し、堅の言葉には耳すら貸さない事があれども。自らの思い描く『最強』を体現した輝夜の言葉であれば、それがどんな物であれ、どんな状況を引き起こそうとも従う。

ゆえに、千壽は従った。

女を騙る愚物がいたら全力で潰しなさい、そう言つて微笑んだ輝夜の言葉に。

「ジブンを見つけたひとり指さしてきてさ、十五〜六人いた内の半分くらい？ が

コツチ来たんだよネ。ミラレター捕まえろーって感じで」

最低でも五人以上が、目撃者となつてしまった女子中学生たる自分自身を目掛けて押し寄せて来た。常人であれば震えてトラウマになりかねないその事実を、ことも無げに告げた千壽は鼻を鳴らす。

「それで距離が近づいてわかつたんだ。あ、愛美愛主のトップクダ！ って」

千壽の話を輝夜は静かに聞いていた。

身振り手振りで必死に現場の状況を語り続ける妹分の姿は、彼女にとって中々に愛おしい物があったのだがしかし。

「ついでにあれが喧嘩じゃなかつたつてのもわかつた……。人集りがハケて中心が見えただ。その、裸に剥かれて泣き叫ぶ女と、血塗れで倒れてた裸の男が」

「……………そう、」

空気に重み加わつた、そんな錯覚に身震いしつつ千壽は続ける。

状況を瞬時に把握した彼女は、向かい来る愛美愛主の特攻服で身を飾る面々を秒で鎮圧。輝夜の教えに従い、残りの愛美愛主を潰さんと駆け出したと言う。



「ケド、邪魔が入ったんだ。フードで顔を隠したヤツがいきなり乱入してきて、負ける気はしなかったしジブンは一発も貫わなかったのに……なんかアイツスツゲエ気持ち悪かったんだヨ」

「気持ち悪かった……ね」

自身の体感を言葉に出来ず、四苦八苦する千壽に輝夜は考える。

曰く、当たったはずの打撃が通っていないような感覚。

曰く、蹴り飛ばしたにもかかわらず感触が軽い。

曰く、何度攻撃を叩き込んでもまるで無傷だと言わんばかりに立ち上がる。

輝夜は納得した。

確かにそれが事実であれば、相對した側は気持ち悪いであろう。

「それで、ソイツとヤってる間に愛美愛主が逃げてて……」

最後はフードの男にも逃げられた、そう締め括った千壽の表情は暗く沈んでいる。

その後、彼女は救急車を呼び輝夜にも連絡を入れて今へと至った。

「その……ゴメンな、カグ姉え。ジブン」

「千壽はなにも悪くないわよ」

「でっ」

東京卍會・参謀副総長直属・親衛隊総隊長明司千壽。

通称を『無比』またの名を『戦姫の懐刀』と呼ばれ、負けることを許されない地位に就く千壽の自責の念を感じ、輝夜は少女の髪を白魚のごとき指先で優しく梳いた。

「大丈夫よ。あなたは負けていないし、間違ったこともしていないわ」

「けどフードの、たぶん重要なヤツを正体も掴めずに逃したんだ……」

「東出で一二を争う武闘派のあなたを相手に、単独でやりあつて逃げ出せる時点ではどの手練よ？ 誰も文句なんて言わないし、この私が言わせないわ」

言いつつ、輝夜は考えていた。

唐突に動き出した愛美愛主について。

その愛美愛主を援護したフードの存在について。

なによりも、千壽の電話を受けてから感じていたきな臭い匂いについて。

(黒幕X……タイミングとしてはおかしくないわね)

輝夜が黒幕Xの存在を知り、鈴仙を標的とした一件へ釘を差して数日。

彼女は鈴仙に普段通りの生活をおくらせていた。

その狙いは一つ。優曇華院鈴仙を蓬萊山輝夜は囹として使い罫を張っている、黒幕Xに對してそのように錯覚させるためだ。

無論、輝夜に大切な家族を囹として使うなどといった考えは毛頭ない。

件の直後には鈴仙へと事情を伝え、本人に警戒を促しつつ、秘密裏に私服で身を包む

SPの中でも凄腕とされる猛者を二十人体制で護衛として常時付ける徹底ぶりを發揮してみせていた。加えて、鈴仙の師であり輝夜の最も信賴する永琳が「この子は私が絶對に守るわ」とまで言つてのけている。

この状況でなお鈴仙を害せるのであれば、輝夜に黒幕Xへ抗う術はないであろう。

ならば次に固めるべきは佐野万次郎の妹。輝夜の可愛がる佐野エマであり、輝夜が幼馴染全員で対策会議を開いた直後に今回の一件は起きていた。

(エマは狙わずに……愛美愛主が動いて……つまり)

もはや蓬萊山輝夜に近しい人間は狙えない、

蓬萊山輝夜は確実に対策を取ってくる、

ならば別口で責め立てよう、

黒幕Xはそのように判断したのであろうと、ここにきて輝夜は確信した。

「次から次へとよくもまあ卑劣に……下衆風情が」

「カグ姉え……?」

輝夜の思わず零したドス黒い言の葉に千壽は首を傾げた。

「……なんでもないわ。ところで千壽、あなたバイクはどうしたのよ?」

「シンイチローのところ。修理中なんだ」

「そう。なら送るから乗りなさい」

「ありがとうカグ姉え」

深夜の静謐に機獣の唸りが轟き、短い咆哮を幾度となく繰り返す。

「しっかりと捕まってなさいよ？」

「ウン！ ダイジョーブ」

輝夜は一つ勘違いをしていた。

彼女は今回の一件を、愛美愛主を使った黒幕Xによる無作意な攻撃。輝夜自身への嫌がらせだと思いきや、こんでしまっていた。

その間違いに気づくのは、これより数日後の話である。

「出すわよ」

「オツケー」

夜の都会に機獣は咆えた。

主の荒ぶる感情を代弁するようにして。

## 蓬萊山輝夜に成りました。 5 / 2

仕事終わりの宵の口に呑み暮れていたであろう、帰宅途中の企業戦士が自慢気に千鳥足で酔拳を披露してゆく。されど職業を間違え酔拳を使えない哀れな戦士の横へ立つのは、歳の差が明らかな男へ向けて愛嬌たっぷりに笑顔を振りまく夜の蝶だ。

身奇麗なドレス姿で夜を舞う彼女の背後にはどこから来たのか、どこへ向かうのかすらも想像のつかない外国人グループが屯していた。言語不明の会話を無遠慮に繰り広げる彼らは、無駄に上機嫌で派手に着飾る男女の集団を見て何事かを言い合う。

そんな場所へ塾帰りであろうスクールバッグに制服姿の少年が単語帳を片手に合流すると、少しの間を置いた後に嫌悪を露わとして距離を取った。

其処は渋谷のスクランブル交差点。

正式名称を渋谷駅前交差点である。

彼の場所は日本における都市風景の象徴とされており、また『世界でもっとも有名な交差点』にして『世界でもっとも混雑している交差点』という異名をも持つ、日本有数の外国人にも人気を誇る観光地であった。

時刻は直に22時を回り、夜遊びを始めんと若者たちがひしめく頃。

街を飾る幾機ものデジタルサイネージからは賑やかなメロデイが鳴り響いては映り代わってゆき、主張の激しい大音響スピーカーに負けじとストリートミュージシャンたちが声を張り合う。

縦列駐車から飛び出したタクシーへトラックがクラクションをかき鳴らし、車線を割って入ったセダンに向けて後続のハイエースも続いてクラクション。四方八方に音、音、音。まさに『音の戦場』と言つて差し支えない其処で日常を過ごす人々は、誰も彼もが己の世界へ閉じこもつて好き勝手に生きていた。

まるで周囲の発する音など「自分の生きている世界には無関係だ」とでも言うようにして。例えば口論が聞こえようと、不穏な単語が飛び交つていようとともである。

彼らはそれが己の生きる世界に関係なければ、あるいは興味関心の一切向かない内容であれば、右から左へとすべてを聞き流しては忘却してゆく。そうでもしなければ五感聴覚からの情報過多で死んでしまうとも言うように。

それが渋谷の、都会で生きる人々の日常にして常識である。

其処に広がるのは昨今の都会に完成した恒常的光景。つまり渋谷スクランブル交差点に身を置く人々は、今日も変わらずに無関心な雑音を忘却の彼方へと聴き流す。

そのはずであつた。

初めに車の走行音が連鎖して止まり始めた。さながら緊急車両へ道を譲るようにし

て、スクランブル交差点に遠い車両から順順に脇へ寄つては止まってゆく。

サイレンは、鳴っていない。

それを見ていた通行人が立ち止まり、不思議そうに車道へ歩み寄つた。

ひとりかふたりに、ふたりは四人にと、その数を増す。

そうした人々は気づく。

微かな音に。渋谷スクランブル交差点にありふれた喧騒とは異なる音。日常を生きる彼らにとつては、遠く非日常をもたらず物騒極まる旋律に。

その人々の気づきは、伝播し広がり続けた。

信号待ちの通行人の群れが遠くを覗き見る。

客待ちのタクシードライバーが窓から顔を出す。

楽器を弾き鳴らすのに夢中であつたストリートミュージシャンが手を止めた。

酔いどれ拳法を使おうと足掻く戦士は素頓狂に固まり。

妖艶に微笑んでいた女は素を晒して。

外国人のグループは周囲の異常に戸惑いを見せ。

若い男女の集団は先以上のハイテンションで道路縁に踊りだし。

面倒に巻き込まれてはたまらないと逃げ出したのは学生だ。

そして、その時は訪れた。

2005年7月19日22時00分――。

渋谷でもっとも騒がしい中心街、朝から晩まで稼働し続けるデジタルサイネージが、一斉にブラック・アウト。次いで、すべてのビジョンに『卍』が浮かび上がった。

東京で『黒地に黄金卍』の意味するモノを知らぬ者はいない。

街随一の有名人たる彼女の背負う象徴を知らぬ訳がないのだ。

そうして、おびただしい数の単車が交差点へと雪崩れ込む。

法律など知らぬと言わんばかりに、信号も車線すらをもお構いなく。止められるものなら止めてみせると、我が物顔で押し寄せた単車は総勢二百台を超していた。

鳴り響く直管コイルが大地に轟き、摩天楼のガラスを震わせる。

さながら世紀末の無法地帯。日本のヨハネスブルグと化した渋谷の交差点に、数千人が足を止められ、万を超す人々の視線が釘付けされていた。

その中には恐怖に身を寄せ合う者たちがある。

滅多に見れない光景に興奮冷めやらぬ者もいた。

中には「輝夜姫万歳」「輝夜様」といった声援を送る者もおり、傍迷惑そうに顔を顰める者など反応は様々だがしかし。群衆の大半が携帯端末を、あるいはカメラや映像機器を手に、何が起るのかを今か今かと待ち構えていた。

其処へ一台の車が現れる。



卍の黒旗をはためかせる卍印の單車に先導されながら、單車によつて築かれた道の中央を進む車は米國産の巨大なピクアップトラックだ。

車高を異様に上げられた黒塗りのピクアップトラックの荷台では、東京卍會の特攻服に身を包む二人組が佇んでいる。手にはそれぞれ『初代東京卍會』の族旗が握られており、二枚の黒旗が交差する形で構えられていた。

ピクアップトラックはそのままゆつくりと交差点の中央へ向かう。

いつしか耳を覆いたくなるほどの騒音は鳴りを潜め、渋谷で最も賑わう交差点には異様な沈黙の舞台が出来上がっていた。

群衆の中、誰かが言う。

何が起きているんだと、何が始まるんだと、喉を鳴らす。

無法地帯と化したはずのスクランブル交差点は、気づけば二百台からなる單車の軍勢によつて綺麗に隊列が組み上げられていた。

それはいつそ、普段の光景よりもよほど規律に満ちている。

「総員、整列！」

夜の沈黙した舞台に響いたのは年若い男声。腹部の底から張り上げられた野太い号令係の一声に、総勢二〇〇余名の特攻服が一斉に動き出す。

同時に、ピクアップトラックが交差点中央で止まった。

そうして、

「総長、並び副総長、参謀副総長に！ 礼ッ！」

『お疲れ様ですッ！』

二二三〇余名による頭を下げたの大合唱に合わせて、ピックアップトラックの後部座席から特攻服の佐野万次郎、龍宮寺堅、蓬萊山輝夜の三人が姿を表す。

彼らはそのまま悠々と二メートルはある荷台へと飛び上がると、交差する族旗を背に万次郎を中心として仁王立った。

渋谷の中心の万の視線が、たった三人の中学生へ向かう。

それらをまるで意に介さず、堅の手渡した拡声器に万次郎が口開く。

「東京卍會総長、佐野万次郎だ」

静まり返った渋谷の中心に、拡張された電子音声が響き渡る。

「オレは此処に布告する！ 人道を踏み外し外道に落ちた新宿の愛美愛主！ そして愛美愛主に繋がる者、愛美愛主に協力する者、そのすべてを、東京卍會の総力を上げて全力で叩き潰すとッ！ 一人も逃さねえ……誰一人だ！ 明後日、7月21日の22時！ 場所は九代目黒龍の眠る地！ 其処で互いの存続を賭けた全面戦争をやろうぜ長内くん！ そして今、この場にいるオマエらは全員が生き証人だ！」

次いで、輝夜が拡声器を手にする。

「東京社会参謀副総長の蓬萊山輝夜よ」

群衆は息を呑み、誰もが瞬きもせずに彼女を注視しだす。

それで良いと輝夜が嗤った。

その化けの皮を、剥がせる者はいない。

「今日こうして私たちが動いたのは、あなたたちに広めて欲しいから。愛美愛主が行った悪行を、女性に振るつた非道な暴力の数々を……そして、協力して、私たちに教えて欲しいの。愛美愛主の人間と接触している者のことを、なにか知っていることを、どんなに些細な事でも構わないから教えて欲しいの」

ひいてはそれがあなた自身の身を守ることに繋がるはずよ、そう締め括った蓬萊山輝夜は全力で微笑んだ。その心内に、すべては自身の思うがままだというほくそ笑みを押し隠しながら。

「……！ 了解です。マイキー、輝夜、サツが動いた。退くぞ」

渾身の魅了を振る舞う輝夜に、携帯片手に堅が割り込む。

彼の通話相手をよく知る少女は、一度頷くと最後の一手を打ち込んだ。

「最後にプレゼントよ。みんなで読んでちょうだいね」

語尾にハートの付きかねない語調で言った輝夜は千壽を見やる。

頷く腹心に、今度は本心から微笑み輝夜は荷台を飛び降りた。

万次郎と堅がそれに続き、ピックアップトラックの後部座席へ乗り込む。

「総員、撤収！」

そうして号令係の一声に、ふたたび世界へ騒音は舞い戻ってくる。

静寂からの機獣による大合唱は、先以上の轟音を群衆へと思わせた。

「親衛隊各員はビラを撒きつつ撤収ダゾッ！ヌカルなよ！」

その最中、大排気音を物ともせず、声を通したの千壽だ。

彼女は輝夜印の羽織りの袖口からA4サイズの紙束を取り出すと、器用に片手で単車を操りつつ群衆目掛けてばら撒いてゆく。そんな千壽へ続くようにして、同じく輝夜印の羽織りを着こなす親衛隊の面々も紙束を夜風に乘せていた。

夜の渋谷に季節外れの吹雪が舞う。

それを窓越しに、輝夜はひとりせせ笑って呟いた。

「まずは三手、」

この一件は数時間と掛からずに都内全域へと広まってゆく。

とかく不良界限で知らぬ者は一人としてなくなり、翌日には神奈川県内の不良たちが挙って腰を上げる事態へと発展した。

## 蓬萊山輝夜に成りました。 5 / 3

マイキーこと佐野万次郎に出会ってしばらく。花垣武道は陰鬱な気分で夜の繁華街を彷徨っていた。

その原因は一週間ほど前に急遽開催された、橘日向の自宅マンションでの勉強会にあった。より正しくは勉強会の途中に発覚した花火大会の開催であり、それを見物しようとした屋上で偶発した事故に起因している。

『タイムリープの発動条件はボクとの握手です』

現代で橘直人は確かにタケミチへそう言った。

事実、最初と異なり今回は自分の意思で過去へと舞い戻ったタケミチが、現代でタイムリープ直前に記憶しているのは直人との握手だ。

『君にしか姉は救えない！』

その言葉を耳に現代でブラックアウトした視界が、次に映したのは十二年前の喧嘩賭博の対戦相手であった。

唐突な状況に混乱こそしたものの、今に思い起こしてみれば直人の言葉の正しさが証明された瞬間だ。

同時にそれは花火大会の日。

恋人である日向の手を握ろうとして、ついうっかり彼女の弟の手を握ってしまった瞬間。中学生の花垣武道が現代の冴えないフリーターに戻ってしまうことを意味していた。

にもかかわらず。

タケミチは中学生のままであった。

いくら待てども、直人の手を握り直しても、現代への回帰現象は起こらず。ただ恋人から白い目を向けられた。

『タケミチ君……？ ナオトの手なんて握って……え、もしかして、そんな訳ない……よね？ 大丈夫だよね？』

挙げ句に直人からも距離を取られ「そっちの趣味は……」などと言われる始末であった。

タケミチは「お前の言葉が原因なんだけど!？」とは思いつつも日向の手前、声を大にして言う訳にもいかず。彼は花火そっちのけで弁明に励む羽目となった。

そして、タイムリープの出来ない状況を放置する訳にもいかないタケミチ。よって彼は誤解を解き、その後で秘密裏に直人との密会を果たすことにした。

その密会の場でタケミチは、未だ子供の橘直人にすべてを打ち明け相談した。恥も外

聞も捨て去り、年下に頭を下げて「助けてくれ！」と懇願したのだ。

『話はわかりました……けど、ごめんなさい』

それが相談を受けた直人の第一声であった。

そのまま彼は続ける。

『ボクにもわかりません……』

タケミチは愕然と、直人の言葉を聞いていた。

同時に、「だろうな……」という諦念が湧く。

一体全体どこの世界に「未来のあなたに言われ、記憶を引き継いで過去を変えに来ました。でも帰り方がわからないから教えてください」などという、妄言地味な言葉へ即答できる中学生がいるというのであろうか。

話を信じてくれただけでも大金屋というものだ。

『でも、可能性ならあります』

されど、落胆したタケミチを直人は見捨てなかった。

少年は、あくまで「可能性」と念押しして続ける。

『話を聞く限り、前回現代へ戻った時にタケミチ君は大きく過去を改変していますよね？』

タケミチが一回目の過去からの帰還時。

変わったものはたった一つ。

しかしその一つは、大きな意味を持っていた。

『そう、死ぬはずのボクが生きていた……』

タケミチの主観では「生き返った」が正しいであろう。

その原因、死ぬはずの橘直人が死ななかつた理由を、タケミチは当人から直接に聞かされていた。

『未来のボクは過去へ飛ばされて来たあなたの言葉を信じて行動した。その結果ボクの死は回避され、あなたの知る歴史と大きく異なる転換史を迎えました……姉は、残念ですが』

つまり、と一拍置いて直人は言った。

『歴史を変えるほどの大きな事を過去で成せば、未来に戻れるのではないでしょうか？』  
ここで話が終わっていれば、タケミチは可能性に賭けて邁進するだけで事すんでいた。

子供と言えども頭のいい直人の推測には、少なくとも矛盾はなくタケミチ自身が納得を示したのだから。

だが、そこで緊張の解けたタケミチが零した台詞は、直人の状況推測をひっくり返すに十分な威力を持っていた。



『はあくよかったあ！ 記憶にないホーライさんがいたり、未来に戻れなくなったり、オレももうどうしたら良いのかテンパっちゃってさあ。ほんと直人がいてくれてよかった！』

『……？ ホーライさんって、輝夜姫ですよ？ 記憶に無いつてどういう』

『ああ、そうなんだよ！ オレ過去に戻ってくるまで蓬莱山輝夜なんて全然知らなくてさあ。もうビックリよ。はは』

『蓬莱山輝夜を……知らなかった？ あの、東方グループ代表の一人娘、都内なら誰もが一日一回はその名を耳にするとさえ言われる輝夜姫を……未来から来たタケミチ君は存在すら知らなかった、と？』

その後、急に考え込んだ直人はタケミチに質問を繰り返した。本当に知らないのか、ありえない事ではあるが忘れていただけでは、中学時代のことをもつとよく思い出して、と。

タケミチはしどろもどろに、それでいて必死に答えた。

『タケミチ君……もしかしたら、もしかしたらですよ？ あなたのいる此処は、この世界は、あなたのいた未来に続く過去ではないかもしれないかもしれません』

直人は言い聞かせるように、オカルトの持論を語った。

平行世界における時間干渉の影響。この世界論でタケミチのタイムリープを実行し

た場合、時間軸は一つの川のようなものであり、タケミチがタイムリープをして遡り辿り着いた時点以降の流れが大きく変わる。つまり歴史改変現象が起こり、タイムリープ以前の歴史は消滅してしまう。

言い換えれば、なかった事になる。

『ボクはタケミチ君の話聞いて、この説を考えました。でなければ死んだはずのボクが生きているはずがない』

けど、と言いつつ淀み直人は言紡ぐ。

『もしもタケミチ君のいた本来の時間に、つまり元いた世界に蓬萊山輝夜が存在しなければこの説は破綻してしまう』

平行世界論では、別世界とは交われない。

つまり $\alpha$ 世界の過去にいる人物Aは、未来から観測しても $\alpha$ 世界に存在していなければおかしいのだ。

もしも過去、あるいは未来の一方でしか存在しないのであれば、それは世界の流れその物が違う事を意味してしまう。

これが『過去の人物で、未来では死んでいて知らなかった』ならば問題はなかったのだ。しかし『未来から来たタケミチが、過去でしか存在を確認できない』となれば。

『タケミチ君は日本の某大手電機メーカーの大企業や複数の子会社、世界的財閥や財団

をうろ覚えながらも把握はしていた……にもかかわらず、世界的にも名の知れた東方グループを知らなかった』

その事実は平行世界論で物を語るには、ありえない事だと直人は言い切った。

『ここがあなたのいた流れ、未来から視たはるか後方の光景世界なら、蓬莱山輝夜も東方グループも、どんな形であれタケミチ君が知らないとおかしいんです……』

直人はそう言つて、慎重に考えながら、言葉を続けた。

『タケミチ君が過去から未来に戻れた最初の段階では、タケミチ君はおそらく正しい意味で過去にいた……』

それはタケミチへ語るといふよりは、己の思考を口にしながら思考を回す探偵のような口調であつた。

『その後……そう、蓬莱山輝夜と出会った後だ。その後で、つまりこの時点で世界が移動……していた？ いや、違う……、もしかしたら立体交差並行世界論……タケミチ君はタイムリープして、世界の交わる分岐点に……そう！ そうだ！』

『ナ、ナオト……？』

『世界の交わる、言うなれば複数の世界の可能性が一つに交わる交差点で蓬莱山輝夜に出会ったんだ！ そのせいで蓬莱山輝夜の存在しない世界のタケミチ君は、蓬莱山輝夜のいない過去には行けなくなつてしまつた！ いや、もしかしたら……うん、そうだよ、

未来に戻れないのはそもそも、この世界の未来ではボクが……まって、そうじゃない』  
『ナオトくん……？』

延々と、直人は独り思考に耽った。

それをタケミチが戦々恐々と眺め続けてしばらく。

直人の出した結論は、タケミチを陰鬱とさせるには十二分の威力を誇るものであった。

『タケミチ君……これはあくまでボクの持論ですが、あなたが元いた現代に戻れる可能性はとても低いと思います』

そう言つて、直人は説明した。

曰く、未来に戻れないのはそもそも世界が違うから。

タケミチのタイムリープ能力は、あくまでも直線上の時間軸を十二年単位で前後移動するものであり、世界と世界を跨ぐ力はないのでは、と。

ならばなぜ、今の花垣武道は世界を跨ぎ存在するのか。

『おそらく、蓬萊山輝夜が特異点になったんです』

平行世界論ではなく、立体交差並行世界論。

それを単純に述べれば、平行世界論において世界を一本の線で表すのに対して、立体交差並行世界論は書いて字のごとく。無数の可能性世界を表す線が、あらゆる場所で交

わり、絡み合い、しかし干渉する事なく存在している状態を指す。

例えば、恐竜のいる世界。

例えば、あべこべの世界。

例えば、魑魅魍魎の蔓延の世界。

例えば、存在しないはずの人間がいる世界。

直人は持論と称して『特異点』を説明した。

それはタケミチ本来の、蓬萊山輝夜が存在しない『世界A』と、蓬萊山輝夜の存在する限りなく『世界A』に近くて遠い『世界B』。この二つの『世界A・B線』が本来は決して干渉するはずのない『立体交差点』で、おそらくはタイムリープによる時間干渉に影響されて接触干渉。

そして2つの世界の『相違点』であった蓬萊山輝夜を、彼女の存在しない『世界A』のタケミチが観測したことによって、蓬萊山輝夜は『特異点』化。その『特異点』を観測した『世界A』の存在であるタケミチは、『世界B』のタケミチに強制的に引つ張られて統合される。

その結果として、世界を跨ぐ形になってしまった。

『ボクはそう結論付けました……その、きつきも言いましたけど、あくまで仮説ですし、最初に言ったように未来を大きく変えれば帰れるかも知れません……』

申し訳なきげの直人に、タケミチは言葉を返せなかった。

戻れないかもしれない。過去を変えても世界が違う。それはつまり、橘日向の死を覆せない事を意味していた。

『もし、もしも……』

絶望へ沈んだタケミチに直人が口開く。

それが慰めの言葉なのか、本気の言葉なのかは、タケミチには判断がつかなかった。それでも、僅かな希望を見出したのは確かだ。

『蓬萊山輝夜に接触すれば……』

『世界A・B』の『相違点』である蓬萊山輝夜と、彼女と初めて出会ったその場所こそが、二つ揃って『特異点』になっているのであれば。

『……もしかしたら、帰れるかも知れません』

その言葉を耳にしてから一週間以上。

どのようにすれば蓬萊山輝夜と公園で接触できるのか、タケミチは悩みに悩んで今日も無意味に街を彷徨う。

そんな少年の携帯が、後ろポケットの中で鳴り響き。

「あれ、タケミチ君？」

まったく同じタイミングで背後から掛かった呼び声に、タケミチは振り向きながら眩

いた。  
「ヒナ……」